特有な産物である。

中産階級たる小工業家、小商人、職人、農民等もまた皆、中産階級としての存在を維持し、滅亡を免れんが爲に、ブルジョアジーと戰ふ。故に彼等は革命的でなく、保守的である。否むしろ彼等は反動的である。彼等は歴史の車輪を後ろに廻はさうとする者である。若し彼等が革命的であるとすれば、それは彼等がプロレタリアートに落ちこみかけてゐる事を悟つたからである。彼等は現在の地位を防衛するのでなく、將來の利益を防衛するのである。即ち彼等はプロレタリアートの地位に立つ爲に、自己の特殊な地位を棄てるのである。——

ルンペンプロレタリアート、即ち舊社會の最下層に在る、無氣力な腐敗墮落者もまた、場合に依つては、プロレタリアの革命の爲、その運動に誘ひ込まれる事もあるだらう。けれども彼等の生活狀態の全體から考へて見ると、彼等は寧ろ喜んで反動的陰謀の爲に買收されるだらう。

舊社會の生活條件は、今は既にプロレタリアートの生活條件の中に滅却されてある。プロレタリアは無財産である。彼等がその妻子に對する關係は、もはやブルジョアの家族關係と少しの共通點をも持つてゐない。近世的産業勞働、即ち資本の下への近世的屈從は、イギリスはフランスに同じく、アメリカはドイツに同じく、總てのプロレタリアからその國民的特徴を剝ぎ去つてゐ

る。法律、道徳、宗教、彼等に取つては皆な悉くブルジョア的偏見であつて、その背後には必ずそれだけのブルジョア的利益が隠されてゐるのである。

從來政權を握つた總ての階級は、全社會を自己の收益條件に屈從させる事に依つて、自己の既得の生活地位を確保しようとした。然るにプロレタリアは、從來の自己の所得方法、從つて又、從來一般の所得方法を××する事に依つてのみ、初めて社會的生産力を握り得るのである。プロレタリアは自己の所有として保護すべきものが一つもない。彼等は只、あらゆる從來の、私有的保證と私有的保護とを××××足りるのである。

從來の總ての運動は、皆な少數者の運動、若しくば少數者の利益の爲にする運動であつた。プロレタリア運動は、大多數の利益の爲にする、その大多數の獨立の運動である。然るに現社會の最下層たるこのプロレタリアートは、外面の正式社會を構成してゐる所の、上層建築全部を空中に×××さなくては、起きあがる事も、立ちあがる事も出來ないのである。

プロレタリアートのブルジョアジーに對するこの鬪爭は、實質上はそうでもないが、形式上からすれば、最初一國的である。各國のプロレタリアートは必ず先づ自國のブルジョアジーを處置せねばならぬ。

我々は今、プロレタリアートの發達について、その最も一般的な諸階段を叙述し、現社會の内部に於ける、大なり小なり覆面された××から、遂にそれが××して公然の××となり、ブルジョアジーを××してプロレタリアートの××を××立する點にまで到達した。

從來の總ての社會は、前述の通り、壓伏階級と被壓伏階級との對立を基礎としてゐた。けれども、一階級を壓伏する爲には、その階級が少なくとも奴隷的存在を續け得るだけの、或る生活條件が保證されてあらねばならぬ。農奴は農奴制の下に於いて、そのコンミュン(村)の公民に立身する事が出來たし、小市民(小町人)は又、封建的專制政治の束縛の下に在つて、ブルジョアに出世する事が出來た。然るに近世の勞働者は之に反し、産業の進歩と共に向上するのでなく却つて自己の階級の生活條件より以下に段々深く沈んで行くのである。即ち勞働者は貧民となり、貧民は人口と富との增加に比し、一層急速に發達する。そこでブルジョアジーが、猶ほ永く社會の支配階級として存續する事、及び自己の階級の生活條件を規準として、それを社會に強いる事の無資格が明瞭となる。彼等が支配者たるに不適當な所以は、即ちその奴隷制の内部に於いて、奴隷に生存その者をすら確保し得ない點にある。又彼等が奴隷から養はれるのでなく、却つて自ら奴隷を養はねばならぬ程の境遇に、奴隷を沈ませるの止むなきに至つた點に在る。社會はもはやブ

ルジョアジーの下に生活する事が出來ない。換言すれば、ブルジョアジーの生活はもはや社會と兩立し得ないのである。[4]

ブルジョア階級の存在と支配との根本條件は、私人の手の中に富を集積する事であり、資本の形成および增大である。そして資本の條件は賃金勞働である。賃金勞働は全く勞働者間の競爭の上に立つてゐる。然るにブルジョアジーが無意識に、そして無抵抗に促進した所の産業の進歩は競爭に依る勞働者の孤立を改めて、協力に依る彼等の××的結合を作る。だから大産業の發達はブルジョアジーが生産を爲し、産出物を領有するその基礎自體を、ブルジョアジーの足の下から引き拔くものである。故にブルジョアジーが産出する者は、第一に自分の墓堀人である。ブルジョアジーの××と、プロレタリアートの××とは、共に不可避である。[4]

(4) 本篇の全部に亘つて、『原則』篇の初の部分（プロレタリアートとは何か、産業革命、××××の廢止等の關する諸點）を善く對照せよ。

プロレタリアと共産主義者（一八四七年）

Proletarier und Kommunisten (1847)

マルクス・エンゲルス

共産主義者は一般のプロレタリアに對して、どんな關係に在るか。

共産主義者は勞働者の他の諸黨派と對立して、特殊の一黨派を作るものではない。

彼等は全プロレタリアートの利害から分離した、何等の利害を持つ者ではない。

彼等は特殊の原則を定めて、プロレタリア運動をその型に入れようとする者ではない。

共産主義者がプロレタリアの他の諸黨派と異なる所は只これである。即ち一面には、プロレタリアの種々なる××的鬪爭に於いて、その國籍から獨立した所の、全プロレタリアートの共通利益を指示し標榜する。そして他の一面には、プロレタリアートとブルジョアジーとの鬪爭が經過する種々なる發展段階に於いて、常に運動全體の利益を代表する。

故に共産主義者は、一面、實際上には、全世界の勞働諸黨派の中に於いて、最も斷然たる、常

に最も前進的な部分である。そして一面、理論上には、プロレタリア運動の條件、進路、及びその總結果に關し、他のプロレタリアート大衆よりも、一層明晰な洞察を持つ者である。

共産主義者の直接の目的は、他の總てのプロレタリア諸黨派のそれと同一である。即ちプロレタリアートを一階級に結成する事、ブルジョアの××を××する事、プロレタリアートの手に政權を握る事。

共産主義者の理論上の主題は、決して某々社會改良家達の發明し、若しくば發見した、理想や原理の上に存するものではない。

彼等は只、現存せる階級闘爭の實際的諸關係、即ち我々の眼前に起りつゝある歴史的運動の、一般的表現に過ぎない。從來の財産關係を廢絶する事は、必ずしも共産主義者ばかりの特徴ではない。あらゆる過去の財産關係は、絶えず歴史的の轉換を受け、又絶えず歴史的の變化を蒙つている。

例へば。フランス革命は、ブルジョア的財産の便宜の爲に、封建的財産を廢絶した。

故に共産主義の特徴とする所は、一般財産の×××ではなく、只ブルジョア××の×××である。

然し近世のブルジョア的××××は、――階級對立の上に立つ所の、即ち一階級に對する他階

級の搾取の上に立つ所の、――生産物の産出法と領有法との、最後の、最完全の表現である。

この意味に於いて、共産主義者はその理論を一言に約する事が出來る。曰く××××の××。

世人は我々共産主義者を非難して云ふ。共産主義者は、人が自己の勞働に依つて獲得した所の××××、即ち有らゆる個人的の自由と活動と獨立との根底たる××を廢絶しようとすると。

自己の勞働に依つて、自己のもうけだした××と云ふのか。それはブルジョア財産の以前に在つた、職人の財産、農夫の財産の事を云ふのか。それならば我々が廢絶するには及ばない。産業の發達が既にそれを廢絶し、猶ほ日々廢絶しつゝある。

それとも諸君は、近世のブルジョア的××××の事を云ふのか。

それとも、賃金勞働、即ちプロレタリアの勞働が、自己の爲に財産を作るとでも云ふのか。

（そしてそれが廢止されるとでも云ふのか。）決して否。それは只だ資本家を作る。資本は賃金勞働を搾取する財産である。そしてそれが更に賃金勞働を作り、更にそれを搾取するといふ條件の下に於てのみ、增大し得る所の財産である。現今の形體に於ける財産は、資本と賃金勞働との對立の中に生存してゐる。我々をしてこの對立の兩面を檢せしめよ。

資本家たる事は、生産界に於いて單純なる個人的地位を持つばかりでなく、また一つの社會的

地位を持つ事である。資本は協力的産物である。多數部員の共同作業に依つてのみ、否それを究極すれば、社會全員の共同作業に依つてのみ働かされ得るものである。

故に資本は決して個人的の力でなく、一つの社會力である。

故に資本が共有財産、即ち社會全員の財産に變更される場合、それは個人的財産が社會的財産に變更されるのではない。只その財産の社會的特質が變更されるのである。即ち財産の階級的性質が失はれるのである。

次に賃金勞働を檢せしめよ。

賃金勞働の平均價格は勞働賃金の最低である、即ち勞働者が勞働者としての生命を保つに必要なだけの生活資料の額である。故に賃金勞働者が自分の活動に依つて獲得する所は、只その赤貧の生活を再製するに足るだげの者である。我々は決して、この直接な、――生命の再製の爲にする――勞働産物の個人的領有を廢絶しようとするのではない。即ち他の勞働を支配すべき何等の餘剰をも生じない所の、この領有を廢絶しようとするのではない。我々は只この領有の悲慘な性質――即ち勞働者が資本を增大する爲にのみ生活し、支配階級の利益がそれを要求する間だけ僅かに生活し得るといふ、その悲慘な性質――を無くしようとするのである。

ブルジョアの社會に在つては、生きた勞働者は只、蓄積された勞働を增大する一つの手段になる。共産主義の社會に在つては、蓄積された勞働が、只だ勞働者の生活を擴大し、豐富にし、上進させる手段になる。

故にブルジョアの社會に在つては、過去が現在を支配し、共産主義の社會に在つては、現在が過去を支配する。ブルジョアの社會に在つては、資本は獨立的であり、個性的であるのに、生きた人間は從屬的であり、非個性的である。

然るにブルジョアジーは、こういふ諸關係の廢絶を目して、個性の廢絶！自由の廢絶！と云ふのである。然し無理もない。これは如何にも、ブルジョアの個性、ブルジョアの獨立、ブルジョアの自由の廢絶なのである。

現在のブルジョア的生産關係の下に在つては、自由とは只だ自由貿易を意味し、自由賣買を意味してゐる。

然し賣買といふ事が無くなれば、自由賣買も無くなつてしまふ。一體、ブルジョアジーの自由賣買といふ事、及びその他一切の自由よばわりは、中世時代の制限された賣買、束縛された商人に對してこそ意義もあるが、共産主義が主張する賣買の××、ブルジョア的生産關係の××、及

びブルジョアジー其者の××に對しては、何等の意義もないものである。

諸君は我々が××××を××しようといふのに驚いてゐる。然し諸君のこの現在の社會に於いて、人口の十分の九は既に××××を失つて居るではないか。そしてそれが（少數者の爲に）存在してゐるのは、實にそれがその十分の九の爲に存在して居ないからではないか。故に諸君が我々を非難する所の、その××の××といふのは、社會全員の大々多數の無財産を必要條件とする所の、その××なのである。

要するに諸君は、我々が諸君の××を××しようとするのを非難するのである。如何にも、我々はそうしようとするのである。

諸君は、勞働がもはや資本に變ぜず、貨幣に變ぜず、地代に變せず、つまり獨占的社會力に變じ得ない事になるその瞬間から、――卽ち個人的財産がもはやブルジョア的財産に變形し得ない事になる其の瞬間から、――諸君は個性が廢絕されると云ふのである。

故に諸君は、白狀して居るのである。諸君の謂ゆる個性とは、ブルジョア以外の、ブルジョア的財産所有者以外の、何者をも意味して居ないのである。そして、それらの個性は卽ち固より廢絕すべきである。

共産主義は誰人に對しても、社會的産物を領有する力を奪ふものではない。只その領有に依つて他の勞働を屈服させる所の、その力を奪ふのである。

或者は反對して云ふ。×××が廢絶されれば、それと共に一切の活動が廢絶され、從つて一般的怠惰に落入るであらうと。

若しそうとするなら、ブルジョア社會は既にとくの昔し、怠惰の爲に滅亡してゐる筈である。ブルジョア社會では、働く者はモウからないし、モウける者は働かないではないか。だからこの反對論は結局、資本が無くなれば賃金勞働が無くなるといふ、分りきつた重複語を繰返したに過ぎない。

物質的産物に對する、共産主義的の領有方法と生産方法とに向けられた總ての攻擊は、更に精神的産物の領有と生産とにまで延長されてゐる。×××の廢絶が、ブルジョアに取つて、生産その者の廢絶であるのと同じく、階級的文化の廢絶は、彼等に取つて、一般文化の廢絶と同意義である。

彼等がそれほどに消滅を悲しんでゐる所の、その×××なる者は、大々多數の人に取つては、只だ彼等を機械とする爲の教育である。

然し諸君が、自由、文化、權利等に關する諸君のブルジョア的見解を標準として、ブルジョア××の××を律しようとする間は、論爭は無益である。諸君の思想その者は、ブルジョア的の生産關係および財産關係の産物である。それと同じく、諸君の權利も亦、諸君の階級的意志を法律としたものに過ぎない。そしてその意志の內容は、諸君の階級の物質的生活條件から生じたものに過ぎない。

諸君の利己的謬想、――卽ち諸君の生産關係と財産關係とは生産の進歩に從つて生滅する歷史的關係であるのに、それを永劫の自然法と道理法とに變更させる所の、その諸君の利己的謬想――は、總ての滅亡した過去の支配階級が、皆な諸君と同じく持つて居たものである。諸君が古代の財産に對して理解した所、又封建的財産に對して理解した所のものを、諸君は今、ブルジョア的××に對しては理解しようとしないのである。

家族制××！。共産主義者のこの破廉恥な提案に對しては、最急進派の人々すらも憤激する。

然し、現在の家族制度、ブルジョアの家族制度は如何なる基礎の上に立つてゐるか。資本の上、私收入の上に立つてゐる。完全に發達したこの家族制度は、只ブルジョアジーの間にのみ存在してゐる。そしてプロレタリアの强制的無家庭と、公娼制度とが、その補足物になつてゐる。

ブルジョアの家族制は、固よりこの補足物の消失と共に消失する。そして兩者とも、資本の消失と共に消失する。

諸君は又、子供に對する親の搾取を廢絶するものとして我々を攻擊するか。我々は甘んじてその罪人たる事を自認す。

然し、と諸君は云ふだらう、家庭教育を廢して社會教育をそれに代へるのは、最も神聖なる家族關係を廢絶するものであると。

所が、諸君の教育はやはり社會に依つて決定されるのではないか。諸君が教育を施す、その社會的關係に依つて決定されるのではないか。學校などを通して、直接間接に行はれる、社會の干渉に依つて決定されるのではないか。共產主義者は教育に對する社會の影響を發明したのではない。彼等は只その影響の性質を變じて、教育を××階級の勢力から××させようとするのである。

家族制度や教育の事について、又親子の間の神聖な關係などいふ事について、ブルジョアがこんな言ひぶんをしてゐる時、（事實上には）大產業の結果として、プロレタリアの家族關係が段々に××され、その小兒達が單純な商品と勞働器械とに變形されて行くのを見ると、我々は實に嘔吐を催すの感がある。

だつて君等共産主義者は、婦人の共有を行はうとして居るのぢやないかと、全ブルジョアジーが我々に向つて合唱的に絶叫する。

ブルジョアは自分の妻を單なる生産器具と考へてゐる。そして生産器具が皆な共同に利用されると聞いたのだから、その共同利用の運命がやはり婦人の上にも來るものとしか考へられないのは、無理もない話である。

共産主義者の目的とする所は、そういふ單なる生産單具としての婦人の地位を廢絶しようとするに在るのだなどとは、彼等が思ひもそめない事である。

然し何んにしろ、我がプルジョア諸君が、その謂ゆる共産主義者の婦人共有制に對して、道德的義憤を發した事ほど笑ふべきものはない。共産主義者は婦人共有制を創設する必要がない。それはとくの昔から存在して居るではないか。

我がブルジョア諸君は、公娼の事は姑く云はぬとしても、プロレタリアの×や×を勝手にして、それでも猶ほ滿足が出來ないで、更に自分等の×を互ひに誘×する事を無上の快樂として居るではないか。

ブルジョアの結婚は、その實質上、正に××共有制である。さすれば、彼等が共産主義者に對

して加へ得る攻撃は、偽善的に隠蔽されてゐる××共有制の代りに、公然たる正式の婦人×××を設けようとするからイケナイ、と云ふのが精々である。猶、云ふまでもない事だが、現今の生産關係を廢絶すれば、それと共に、その關係から生じた婦人共有制、即ち公私の賣淫制度が、皆な消滅するのである。

共産主義者は、更に××を廢絶し、國民性を廢するものとして攻撃されてゐる。

勞働者は××を持つてゐない。その持つてゐない者をその人から取る事は出來ない。プロレタリアートは先づ政權を握らねばならぬ、國民的の階級たる地位に登らねばならぬ。自己を國民として結成せねばならぬ。であるから、その意味に於いて、ブルジョアジーの意味とは全く違ふが、やはり國民的である。

國家間の差別と人種間の反目は、ブルジョアジーの發達の爲に、通商の自由の爲に、世界市場の爲に、生産方法と、それに相應する生産關係の同一化との爲に、もはや段々消滅しつゝある。

プロレタリアートの支配は一層多くそれを消滅させるであらう。文明諸國間の（少くとも、それだけの）協同行動が、プロレタリアート解放の最大條件の一つである。

一個人が他個人を搾取する事が止めば、それと同じ比例に於いて、一國民が他國民を搾取する

事も止むであらう。

一國の內部に於ける階級對立が無くなれば、國と國との間の敵視も亦た無くなるであらう。

宗教的・哲學的・及び一般理想的見地からの、共產主義に對する攻擊は、一々精細に論究するだけの値がない。

人間の生活上の諸關係と共に、その社會的諸關係と共に、その社會的存在と共に、その思想、觀念、及び見解、一言にすればその意識も亦た變化するといふ事を理解するのに、そんなに深い洞察力が入るだらうか。

古來、思想の歷史が示してゐる所のものは、精神的生產が物質的生產と共に變形するといふ事より外に無いではないか。或る時代を支配する思想は、いつでも只、その支配階級の思想であつた。

或る思想が全社會を革命したといふ事がある。それは只、舊社會の內部に、新社會の要素が發育したといふ事實、古い生活關係の解體と共に、古い思想の解體が同一の步調を取つたといふ事實を指すに過ぎない。

上古の世界が滅亡に瀕した時、古い諸宗教は皆なキリスト教に征服された。十八世紀に、キリ

スト教の思想が啓蒙思想（合理思想）に壓せられた時、封建社會は當時の革命的ブルジョアジーと致命戰をやつてゐた。良心の自由と信仰の自由といふ思想は、只だ自由競爭の優勝を智識界について言明したに過ぎない。『けれども』と誰かゞ云ふだらう。『宗教的、道德的、哲學的、政治的、法律的の諸思想は、如何にも歷史發展の道程に於いて變化したに相違ないが、宗教、道德、哲學政治、法律は、常にその變化の間に嚴存した』と。

『それに又、自由、正義などといふ、あらゆる社會狀態に共通する、永劫の眞理がある。然るに共產主義は、その永劫の眞理を廢絕する。宗教。道德を改新するものではなく、全くそれを廢絕する。だから共產主義は、あらゆる過去の歷史發展と矛盾する』と。

この難詰は一體どういふ事に歸着するか。あらゆる過去の社會の歷史は、階級對立の中に發展している。そしてその階級對立は時代々々に從つてその形體を異にしている。

然しその形體は如何にもあれ。社會の一部分が他部分を搾取するといふ一點は、總ての過去の諸時代に共通な事實である。從つて、總ての時代の社會意識が、その表現の多種多樣なるに拘はらず・或る共通の形式を以て働くのは、當り前の事である。そしてその意識形態は、階級對立の全き消滅と共に、初めて完全に解體すべきものである。

共産主義の××は、傳來の××關係との根本的××である。從つてその發展の過程に於いて、傳來の思想と根本的に××するのは、當り前である。

然し共産主義に對するブルジョアの非難は、もうこれで棄て置く事にしよう。

我々は既に以上に於いて、勞働者××の第一歩が、プロレタリアートを支配階級の地位に上げる事に在るを見た。即ちデモクラシーの戰勝に在るを見た。

プロレタリアートはその政治的支配權を利用して、漸々にブルジョアジーから一切の資本を××××であらう。一切の生産機關を國家の手に、即ち支配階級として結成されたプロレタリアートの××に××するであらう。そして生産力の總量を出來得る限り急速に增大するであらう。

勿論、最初は、財産權に對する、及びブルジョア的生産關係に對する、××××に依らなければ、右の事は行はれ得ないであらう。從つてその方策は、經濟上、不徹底であり薄弱であるかに見える。そしてそれが生産方法の全體を變革する手段として避くべからざる方策となる。

尤もこの方策は、それぞれの國情に從つて、それぞれの差異を呈するであらう。

然し最も進歩した諸國に在つては、左の諸方策が大抵一般に行使され得るであらう。

一、××××、及び地代を國家の經費に充てる事。

二、強度の累進所得稅。
三、相續權の廢止。
四、總ての移出民および叛逆者の財產沒收。
五、國家の資本を以て全然獨占的なる國立銀行を作り、信用機關を國家の手に集中する事。
六、交通および運輸機關を國家の手に集中する事。
七、國有工場の增大、國有生產機關の增大。共同的設計に依る、土地の開墾および改善。
八、總人に對して平等の勞働義務を課する事。產業軍隊を編成する事（殊に農業に對して）。
九、農業と工業との經營を結合する事。都會と地方との區別を漸々に廢する事。
十、總ての兒童の公共無料教育。現今の形式に於ける、兒童の工場勞働の廢止。工業生產と教育との結合等。

かくて、發達の進行に連れ、階級的差別が消滅し、總ての生產が總個人の協力（全國民の大組合）の手に集中されるならば、その時、公的權力はその政治的性質を失ふ。元來、政治的權力なる者は、一階級が他階級を壓伏する爲の組織的强力である。プロレタリアートはブルジョアジーに對する戰鬪の必要上、自ら一階級を形成し、××に依つて自ら×××となり、そして、支配階級と

して強制的に古い生産關係を××するのであるが、その生産關係の××と共に、××××の存在條件を廢絶し、階級全體を廢絶し、從つて又、自分の階級的支配權をも廢絶するのである。

かくていよ〳〵、古いブルジョア社會と、その諸階級と階級對立との代りに、各人の自由な發達が衆人の自由な發達の條件となるような、そうした協力社會が生ずるのである。(1)

(イ) 本篇の全部を通じて、前の『原則』篇の內容と充分に善く對照せよ。×××に關する點、家族制度に關する點、婦人共有云々の點、國民性云々の點など、殊に然り。又方策十個條に對しては、『原則』篇に、殆んど同一內容の十二個條がある。

社會主義文書と共産主義文書（一八四七年）

Sozialistische und Kommunistische Literatur

マルクス・エンゲルス

（一）反動的社會主義

(a) 封建的社會主義

フランスおよびイギリスの貴族は、その歴史的地位からして、近世ブルジョア社會に反對する小冊子を書くべき任務を帶びていた。一八三〇年のフランス七月革命に於いて、又イギリスの革命運動に於いて、彼等は更にこの厭ふべき成上り者の爲に組み敷かれた。本氣な政治的闘爭はもはや問題にならなくなつた。彼等に殘されたものは、只だ文筆上の爭であつた。然しその文筆の方面でも、（ブルボン王朝）復活時代（一八一四年から一八三〇年までの古い言草では通らなくなつた。

彼等貴族が世間の同情を喚び起す爲には、自分の利害關係を隱蔽した、只だ搾取されて居る勞働階級の利害關係に於いてのみ、ブルジョアジーに對する訴狀を作らねばならなかつた。かくて彼等は、新らしい支配者を讒謗する歌を歌ひ、又多少とも不祥らしい豫言をその耳に囁いで、僅かに自ら腹いせをして居たのである。

封建的社會主義は、斯樣にして起つた。半ばは哀歌、半ばは皮肉、半ばは過去の餘音、半ばは將來の脅威、そして時には、深酷痛烈な批判を以てブルジョアジーの腹を刺す事があつても、近世史の進路を理解する能力が全く缺けて居たので、その効果は常に只だ滑稽であつた。

彼等は民衆を自分のうしろに集める爲に、プロレタリアの救助袋を旗印として振りかざした。けれども民衆は、屢々そのうしろに集まつた時、彼等の脊中に昔しの封建的紋所を見つけだして、輕蔑の高笑ひを殘して逃げ去つた。

フランス勤王派の一部と、青年イングランド黨とは、この芝居の好適例である。

封建主義者は、自分達の搾取がブルジョアの搾取とその撰を異にして居ると云ふが、それは彼等が、今日とは丸で違つた、そして今日では時代遲れになつてゐる、事情と條件との下に、搾取をやつて居たといふ事を忘れて居るのである。彼等の支配下には近世のプロレタリアは存在して

居なかつたと云ふが、それもやはり、近代のブルジョアジーが彼等の社會組織の必然の子孫だと云ふ事を忘れて居るのである。

それに彼等は、自分達の批評の反動的性質を殆んど隱してゐない。彼等のブルジョアジーに對する主なる詰責は、ブルジョアジーの支配下には、社會の舊組織を全く引つくり返さうとする一階級が發生しかけて居るといふに歸着する。

彼等がブルジョアジーを責めるのは、それが一般のプロレタリアートを作りだしたと云ふ事よりも、むしろ革命的プロレタリアートを作りだしたと云ふ事に在る。

故に彼等は、政治上の實際に於いては、勞働階級に對する壓迫的立法に加擔し、又日常の生活に於いては、そのあらゆる立派な口上にも似ず、黃金の林檎を拾ひ集め、眞理や正義や名譽や、羊毛や砂糖やジャガ芋酒と交易する事を辭しなかつた。(イ)

(イ) この林檎の事は、主としてドイツを指したものである。ドイツでは、地方の貴族や鄕士が、その領地の大部分を番頭役の者に耕作させて、自らその利益を收め、更に又、大規模の砂糖製造をやり、ジャガ芋酒の釀造をやつてゐた。イギリスの富裕な貴族は、まだそこまでの事はやらなかつたが、それでも、怪しげな株式會社の空株券に名義を貸して、地代の減少の埋せ合せをする事を知つてゐた。――エンゲルス

僧侶がいつでも封建貴族と手を携へてゐたと同じく、僧侶的社會主義が又いつでも封建的社會主義に伴つてゐた。

キリスト教の禁慾主義に社會主義的色彩を附けるのは、何よりも容易な事である。キリスト教は私有財産に對し、結婚に對し、國家に對して、熱心に反對したではないか。キリスト教はそれらの代りに、慈善と乞食と、獨身と禁慾と、僧侶生活と教會とを説教したではないか。キリスト教社會主義は貴族の憤怒を淨める爲に、僧侶が注ぐ聖水である。

(b) 小ブルジョア社會主義

ブルジョアジーの爲に亡ぼされた者、近世のブルジョア社會の中にその生活條件を萎微凋落させられた者は、封建貴族階級ばかりではなかつた。中世の特許市民（城外市民）と小農階級とは近世ブルジョアジーの先驅であつたが、工商業の發達の遲れた國々では、これらの階級がやはり、新興ブルジョアジーと並んで生きながらへてゐる。

近世文明の發達してゐる國では、一つの新らしい小ブルジョア階級が形成されてゐる。それはプロレタリア階級とブルジョア階級との間を彷徨してゐるもので、ブルジョア社會の補足的部分として常に新らしく發生してゐる。然しその組織員たる個人は、絶えず競爭の爲にプロレタリア

に突落され、而もそれが大産業の發達に連れ、近世社會の獨立分子としては全く消滅に歸し、その代りに、商工農業に於ける勞働監督者と番頭支配人とを生ずる時節が近づきつゝある。

フランスのような、農民階級が人口の半ば以上を占めてゐる國々では、プロレタリアートに味方してブルジョアジーに反對する文士等が、小ブルジョア的および小農的の標準でブルジョアジーを批評し、又その小ブルジョア的立場から勞働黨に加擔するのは誠に自然の事であつた。かくて小ブルジョア社會主義が起つた。シスモンヂーはフランスばかりでなく、イギリスに於いても、この學派の巨頭であつた。

この社會主義は、最も鋭利に、近世の生産關係に於ける矛盾を解剖した、經濟學者の僞善虚飾を暴露した。又最も有力に、機械と分業との破壞作用、資本と土地との集中、生産過剰、恐慌、小資本家と小農との必然的滅亡、プロレタリアの悲慘、生産界の無政府狀態、富の分配の驚くべき不權衡、諸國民間に於ける必死の産業戰爭、舊習慣、舊家族關係、舊國民性の解體を論證した。

然しこの社會主義は、その積極の目的に於いては、昔しの生産交換方法と共に、昔しの財産關係と昔しの社會とを復興しようとするのか、さもなくば、近世の生産交換方法を、舊財産關係――近世の生産交換方法に依つて刎ねとばされた所の、又刎ねとばされねばならなかつた所の、その

舊財産關係――の外殼の中に、無理に再び押しこまうとするのであつた。いづれにしても、それは反動的であり、又空想的であつた。

製造工業に於いては同業組合制（ギルドの自治制度）、農村に於いては族長制度、それが彼等の結論であつた。

この學派は、その後の發展に於いて、遂に意久地のない宿醉狀態に陷つた。

(c) ドイツ社會主義、又は「眞正」社會主義

フランスの社會主義的および共産主義的文書は、支配階級たるブルジョアジーの壓迫の下に起り、その支配權に對する戰鬪の文學的表現を成して居たのであるが、その文書がドイツに輸入されたのは、丁度、ドイツのブルジョアジーが、封建的專制政治に對して戰鬪を開始した時であつた。

ドイツの哲學者、半哲學者、及び文藝家は熱心にこの文書を耽讀したが、只だ彼等は、その文書がフランスからドイツに移植された時、フランスの生活關係がそれと共に移植されなかつたといふ事を忘れてゐた。そこでこのフランスの文書は、ドイツの社會關係に對して、全くその直接實際的の意義を失ひ、只だ單純な文學的の姿を示してゐた。從つてそれは、人間性の實現に關す

るノンキな學究的思辨となるより外はなかつた。かくて十八世紀のドイツの學者に取つては、フランス第一革命の要求は、『實踐理性』の一般的要求といふだけの意義を持つたもので、革命的なるフランス・ブルジョアジーの意志表現も、彼等の眼中には、只だ純粹の意志、正當の意志、眞の人間の意志の法則としてのみ映じたのである。

そこでドイツの學者達の仕事は只、新らしいフランス思想を、自分等の古い哲學的良心と調和させるか、或はむしろ、自分等の哲學的立場からして、フランス思想を取り入れようと云ふのであつた。

この結合は、丁度、反譯に依つて外國語を取入れるのと同じ遣り方で行はれた。

昔しの僧侶共が、古代異敎國の典籍に依つて、カトリックの諸聖僧の愚傳を作つた事は、人の善く知る所である。ドイツの學者は、俗界のフランス文書に對して、正にその反對をやつたのである。彼等はフランスの原書に基づいて自分等の哲學的駄辯を書いた。例へば、貨幣の作用に關するフランス批評に基づいて、『絕對普遍政治の廢止』を書いたりした。

こういふ哲學的用語をフランスの史的發達の上に當てはめる事を、彼等は行爲の哲學、眞正社會主義、社會主義のドイツ哲學、社會主義の哲學的基礎などと命名した。

フランスの社會主義文書と共産主義文書は、斯様にして明かに去勢された。そしてそれらの文書がドイツ人の手の中で、一階級の他階級に對する闘爭の意義を失つた時、ドイツ人はそれで『フランス的偏見』を克服したと思ひ、現實の要求でなく、眞理の要求を代表したと思ひ、プロレタリアートの利益でなく、人間性の、即ち一般人間の利益を代表したと思つてゐた。然るにその人間とは、どの階級にも屬せず、現實の者でもなく、只だ哲學的空想の雲霧の中にのみ存する者であつた。

斯様に莊嚴な兒戯を試み、賣藥的法螺を吹き立てたドイツ社會主義も、暫くにして漸くその衒學的な無邪氣さを失つた。

ドイツ、殊にプロシヤのブルジョアジーの、封建貴族と專制王政とに對する戰闘、即ち自由主義運動が、次第に本物になつて來た。

これに依つて、謂ゆる『眞正社會主義』は、多年要望してゐた好機會を攫み得て、その政治運動に社會主義的要求を對立させ、自由主義に對し、代議政體に對し、ブルジョアの自由競爭に對し、ブルジョアの言論自由に對し、ブルジョアの立法に對し、ブルジョアの自由平等に對して、その傳統的呪詛を投げつけ、そして民衆に向つては、彼等がこのブルジョア運動の爲に、得る所は一

つもなく、失ふ所は一切の物であるべき事を說法した。ドイツ社會主義は、自分が受賣してゐる所のそのフランス批評が、近世ブルジョア社會の存在を前提とし、及びそれに隨伴する物質生活條件と、それに適應する政治組織とを前提とする者である事を、析よくも忘れてゐたのである。即ちその前提を獲得する事が、ドイツで今漸く問題となつてゐる事を忘れてゐたのである。

故に、ドイツの專制政治と、それに伴ふ僧侶、教授、地方貴族、官僚などに取つては、この社會主義は、ブルジョアジーの襲來に對する、誠に恰好の案山子であつた。

恰かもこの時、ドイツの專制政府は勞働階級の動亂に對して、鞭韃と銃丸との苦い藥を與へた後であつたので、この社會主義は實に甘い口直しであつた。

かくて『眞正社會主義』は、ドイツ政府の爲にブルジョアジーと戰ふ武器となつたと同時に、直接又、一つの反動的利益、即ち特權市民階級の利益を代表してゐた。一體、ドイツに於いては十六世紀以來の遺物である所の、そしてその後絕えず種々の形で復活してゐる所の小ブルジョア階級が、現存社會狀態の特殊の基礎を作つて居るのであつた。

この階級を維持する事は即ちドイツの現存社會狀態を維持する所以であつた。然るにブルジョアジーが產業的および政治的支配權を握れば、一方には資本の集中の爲に、一方には革命的プロ

レタリアートの發生の爲に、この階級が確かに沒落する恐れがあつた。そこで『眞正社會主義』は彼等に取つて、一石二鳥を仆す者の如く見えた。從つてそれが流行病のように蔓延した。

更にこのドイツ社會主義は、空想の蜘蛛の網で織られ、修辭の花で緣を取られ、濃やかな感情の露に浸された、浮世ばなれのした衣の中に、その哀れげな『永久の眞理』を包んだので、右の人々の間に於けるこの商品の賣行は、愈々盛大なものになつた。

斯くて又ドイツ社會主義は、次第々々に、この特許市民(即ち小市民)階級の立派な代表者として、自己の使命を認識した。

彼等はドイツ國民を以て模範的國民となし、ドイツの小市民を以て模範人間と爲す事を宣言した。そしてその模範的人間の醜行に對して、その眞相と正反對なる、隱微な、崇高な、社會主義的意識を附與した。要するに彼等の結論は、直接に、共産主義の『殘虐な破壞性』に反對し、一切の階級闘爭に超越して不偏不黨の態度を宣明するに在つた。今ドイツに行はれてゐる、謂ゆる社會主義文書および共産主義文書は、極少數の例外はあるが、皆この醜穢な、骨拔の著作部類に屬してゐる。(ロ)

(ロ) 一八四八年の革命騷ぎは、總てこの見苦しい傾向を掃ひ去り、その唱導者から、引續き社會主義者と

して立つほどの興味を奪ひ去った。この傾向の主なる代表者であり、又その古典的タイプたる人は、カルルグリユンである。

（二）保守的社會主義、又はブルジヨア社會主義

ブルジヨアジーの一部分は、ブルジヨア社會の永續を計る爲に、社會の病所を匡正する事を希望する。

經濟學者、博愛家、人道家、勞働階級の狀態改善者、慈善事業者、動物虐待防止會員、禁酒會員、其他種々雜多の小改良主義者は、皆これに屬してゐる。そしてこのブルジヨア社會主義が又一個の學說に作りあげられた。。

それの一例として、プルードンの『貧困の哲學』を擧げる事が出來る。

この社會主義的ブルジヨアは、近世社會の生活條件を欲しながら、その必然の發生物たる鬪爭と危險とを免がれたいのである。彼等の欲する所は、革命的および解體的要素を引去つた現存社會である。彼等はプロレタリアートのないブルジヨアジーを希望してゐる。ブルジヨアジーは固より、自分の支配してゐる世界を最善の世界だとしてゐる。ブルジヨア社會主義者はこのおめで

たい考へを、一つの、或は半分の學說に作りあげた。彼等はプロレタリアに對し、その學說を實現して、新らしいエルサレムに到達せよと勸めてゐるのだが、それは實質上、現在の社會に立ち止まりながら、その現在の社會に關する忌はしい思想を取り去れと要求するものに過ぎない。

この社會主義の、一層非學理的な、然し一層實際的な、第二形式は、勞働階級の利益が政治的變化の中に存せず、只だ物質的生活關係、即ち經濟關係の變化の中にのみ存する事を論證して、それに依つて、あらゆる革命運動を勞働階級に嫌はせようとするのである。然しこの社會主義が云ふ所の物質的生活關係の變化とは、決してブルジョア的生產關係の廢絕を意味するのではない。その關係の廢絕は革命に依つてのみ成し遂げられるものであるから、彼等は只、その生產關係の地盤の上に行はれる行政上の改善を意味するのである。從つてそれは又、資本と賃金勞働との關係に何等の變化を與へるものでなく、高々ブルジョアジーをして、その支配費用を節減せしめ、その國家財政を單純化せしめるに過ぎない。

故にブルジョア社會主義者は、單純な修辭的形式に於いてのみ、初めて自分にふさはしい表現に到達する。

勞働階級の利益の爲の自由貿易！、勞働階級の利益の爲の保護貿易！、勞働階級の利益の爲

めの監獄改良！、これがブルジョア社會主義の、最後の言葉であり、只一つマメに考へられた言葉である。

要するに、ブルジョアジーの社會主義は只、勞働階級の利益の爲にブルジョアがブルジョアであると云ふ主張に基づいてゐる。

（三）批評的、空想的社會主義と共産主義

我々がこゝで述べようとするのは、あらゆる近代の大革命に際して、プロレタリアートの要求を發言した、（例へばバブーフの著書などのような）文書についてではない。

一般的動亂の時代、封建社會顚覆の時代に於いて、プロレタリアートが直接に自分の階級的利益を樹立しようとした第一の試みは、プロレタリアート自身の發達が幼稚な爲と、彼等を解放さすべき物質的條件の缺乏の爲とに依つて、必然的に失敗した。元々彼等を解放すべき物質的條件は、ブルジョア時代の産物なのである。そこでこの最初のプロレタリアート運動に伴つた革命的文書は、その內容から云へば、必然に反動的である。卽ちその敎へる所は、一般的の禁慾主義であり、又素朴な平均主義である。

眞の社會主義および共産主義學說、卽ちサン・シモン、フーリエー、オーエン等の學說が、プロレタリアとブルジョアとの鬪爭の、まだ充分發達しない初期の時代に現はれた事は、前に說いた通りである。

尤も、これらの學說の發明者達も、階級の對立と、ブルジョア社會その者の中に於ける解體的要素の作用とを看取した。只だ彼等は、プロレタリアの方面に於いて、何等の歷史的獨立性を認めず、彼等に特殊なる何等の政治運動を認めなかつた。

階級對立の發達は產業の發達と步調を同じくするものであるから、彼等はまだ幾許もプロレタリア解放の物質條件を見出す事が出來ないで、只だ何等かの社會的の學問に依り、社會的の法則に依つて、その條件を作らうと試みた。

そこで社會的の活動の代りに、彼等の思ひつきに依る個人的活動が起り、解放の歷史的條件の代り　空想的條件が起り、プロレタリアを階級として自然に追々と團結させる事の代りに、銘々の作りあげた社會組織の考案が起つた。彼等に取つては、將來の世界歷史は、彼等の社會組織案の宣傳と實行とに歸着すべきものであつた。

但し彼等は、その組織案が、社會の最も痛ましい階級たる、勞働階級の利益を代表する事を悟

つてゐた。プロレタリアは只、最も痛ましい階級といふ意味で彼等の目に映じてゐたけれども、階級闘爭の未發達な形式と、彼等自身の生活上の地位との爲、彼等は自然に、階級對立の上に超然たる者だと信じてゐた。彼等は總ての社會構成員の爲に、その最も善き地位に居る者の爲にすらも、その生活狀態を改善しようとした。從つて彼等は不斷に、無差別に、社會全體に對し、否、殊に支配階級に對して訴へた。人が苟くも彼等の學說を理解する以上、最上可能の社會に對する最上可能の考案として、それを認めない筈がないと云ふのであつた。

故に彼等は、總ての政治的、殊に總ての革命的行動を排斥した。彼等は平和手段に依つてその目的を達しようとした。そして小さな、從つて自然、失敗に歸すべき實驗に依り、その模範の力を以て新らしい社會的福音の道に進まうとした。

この將來社會の空想的描寫は、プロレタリア階級の發達がまだ極めて幼稚であり、從つて自分の地位をも只だ空想的に考へる時代に於いて、社會の一般的改造に對する、彼等の最初の豫感的渴仰から生じたものである。

然しこの社會主義および共產主義文書は、批評的要求をも含んでゐる。彼等は現社會の一切の根本を攻擊した。故に彼等は、勞働者の啓蒙の爲に最も價値ある材料を供給した。將來の社會に

對する彼等の積極的提案、例へば、都會と農村との對立の廢止、家族制の廢止、私的營利事業の廢止、賃金勞働の廢止、社會調和の宣傳、國家を變じて單純なる生產管理機關と爲す事、總てこれらの提案は、全く階級對立の消滅に歸着するものである。然し當時に在つては、その階級對立が漸く僅かに發達しかけてゐたので、彼等はまだその初期の漠然たる、不確定の姿に於いてのみそれを知つてゐたのであり、從つて右の諸提案その者も純然たる空想的意義を持つてゐた。

この批評的・空想的の社會主義および共產主義は、實に歷史發展と逆行する意義を有してゐる。階級鬪爭が發達し成形するに從つて、階級鬪爭に對するこの空想的な超越と、この空想的な攻擊とは、一切の實際的價値、一切の學理的妥當を失つてくる。そこでこの學派の創設者等は、多くの點に於いて革命的であつたけれども、その門弟等は皆な反動的分派を作つて居る。彼等はプロレタリアの歷史的發展に對して、その師の舊說を固守してゐる。從つて彼等は畢竟、階級鬪爭を鈍らし、階級對立を調停しようとする。彼等は今でもやはり、自分等の社會的ユトピアの試驗的實現を夢み、個々のフランステール(八)を起す事、『內國植民地』(二)を設ける事、『小イカリヤ村』(ホ)を作る事などいふ、新エルサレムの小型發行を試み、そしてそれらの空中樓閣を築く爲には、ブルジョアジーの慈善心と財囊とに哀訴せざるを得ない。斯くて彼等は次第々々に、上記の反動的

若しくは保守的社會主義の範疇に落入り、只それと異なる所は、稍や組織的の學理を衒ふ事と、その社會科學の奇蹟的効果に對する熱狂的迷信を持つ事とである。

（八）フアランステールとは、フーリエーの考案になる社會的宮殿の名稱。

（二）內國植民地とは、オーエンの共產主義的模範社會の名稱。

（ホ）イカリヤ村とは、カベーが描き出した共產主義的理想鄕の名稱。

故に彼等は、勞働階級が一切の政治的運動を爲す事に極力反對する。彼等に依れば、政治運動は只だ新福音に對する盲目的不信からのみ生ずるのである。

イギリスのオーエン派がチャーチストに反對し、フランスのフーリエー派が改良黨に反對するのは、卽ちこの故である。(へ)

（へ）この篇と、『原則』篇の第二十四問答との間には、互に參照すべき多くの點がある。

革命的諸黨派共産黨の地位(4)

Stellung der Kommunisten zu den verschiedenen oppositionellen Parteien (1847)

マルクス・エンゲルス

（イ）原語のオッポジチョネルレン・パルタイエンは、もちろん『反對諸政黨』の意味であつて、それを在野諸政黨と譯するのが普通だらうが、こゝでは『革命的諸黨派』とした方が、ヨリ適切だと思ふ。實はその當時に於ける多少とも革命的な、總ての諸黨派を意味するのである。從つてブルジョア黨すらも、それが當時はまだ革命的意義を有して居たので、ヤハリこの分類の中に入れられてある。次にコンミュニストは、前掲の諸篇に於いては大抵『共産主義者』として置いたが、こゝでは他の諸政黨との關係を論ずるのだから、「共産黨」と譯しておく。）

既成の勞働諸黨派に對する共産黨の關係、從つてイギリスのチャーチストや、北米の農民改革黨などに對する、それの關係は、『プロレタリアと共産主義者』の篇に於いて、自然によく分つ

ている。

共産黨は勞働階級の直接眼前の目的と利益との爲に戰ふものであるが、然しその現在の運動の中に於いて、又その運動の將來を代表する者である。フランスに於いては、共産黨は社會民主黨(ロ)と提携して、保守黨および急進ブルジョア黨と戰ふ。但し大革命から傳來した種々の謬見謬想に對しては、批評の權利を保留している。

(ロ) この黨派は、議會に於いてはルドリュ・ロランに依つて、文學に於いてはルイ・ブランに依つて、日刊新聞に於いてはレフオルムに依つて代表され、多少社會主義の色彩を帶びた、民主黨もしくは共和黨の一部であつた。

スキスに於いては、彼等は急進黨を助ける。但し同黨が二個の反對せる要素、即ち一はフランス流の民主的社會主義者、一は急進的ブルジョアジーから成る事を見逃しては居ない。

ポーランドに於いては、彼等は、農業革命を以て國民的解放の主要條件とする黨派を助けている。この黨派は一八四六年にクラカウ一揆を起させた事がある。

ドイツに於いては、彼等は、ブルジョアジーが革命的に行動する時、それと提携して專制王政、封建的地主、及び小ブルジョアと戰ふ。

然し彼等は、未だ曾て一刻たりとも、プルジョアジーとプロレタリアートとの間に於ける敵對關係について、出來得るかぎり明瞭な自覺を勞働者に起させる事を、怠つては居ない。ブルジョアジーの支配と共に必ず施行される筈の、その社會的および政治的諸條件を、ドイツの勞働者が直ちにそのまゝ自分の武器としてブルジョアジーに向け得る爲に、又ドイツの反動諸階級の沒落の後、直ちにブルジョアジー自身に對する戰鬪が始まる爲に。

共産黨は主としてドイツに向つてその注意を集中する。ドイツは今、ブルジョア革命の前夜にあり、そして又その革命が、ヨーロッパ文明國一般の進歩した條件の下に行はれ、猶又、十世紀のイギリス、十八世紀のフランスよりも、遙かに高く發達したプロレタリアートを有し、從つてドイツのブルジョア革命は、正にプロレタリア革命の直接の前幕となり得るからである。

要するに、共産黨は到る處に於いて、社會的および政治的の現狀に反抗する所の、各種の××運動を擁護する。

總てこれらの運動に於いて、共産黨は常に財産問題を標榜している。その財産問題の發達の程度が如何樣であらうとも、彼等は常にそれを運動の根本としている。

最後に、共産黨は到る處に於いて、萬國の民主的諸黨派の、團結と一致との爲に努力する。

共産黨はその主義主張を隱蔽する事を恥とする。彼等は公然として宣言する。彼等の目的は、あらゆる從來の××を×××××するに依つてのみ達せられる。支配階級をして共産主義××の前に××せしめよ。プロレタリアは自分の鎖より外に損失すべき何物をも持たない。そして彼等は獲得すべき全世界を持つている。

萬國のプロレタリア團結せよ!!

國際勞働者協會創立の辭（一八六四年）

The Inaugural Address of the International Workingmen's Association (1864)

カルル・マルクス

（一八六四年九月二十八日、國際勞働者協會創立の日、ロンドン、ロング・エーカー、セント・マルチン館の公開集會に於いて。）

勞働者諸君、同志諸君！

一八四八年から一八六四年に至るまで、未曾有なる産業の發達と商業の增大とがあつたにも拘はらず、勞働階級の困窮が、その期間に於いて減少しなかつたといふ事は、極めて大切な事實である。

一八五〇年、英國ブルジョアジーの保守的一機關たる、消息通の一新聞が豫言した。英國の輸入と輸出が五十パーセント增加するなら、國内の貧民は消失點まで減少するだらうと。

宜しい！。一八六四年四月七日、大藏大臣グラッドストーンは、一八六三年に於ける英國の總輸入が、『遠い昔でもない一八四三年の總輸出入に比べて、殆んど三倍といふ、驚くべき多額、』即ち四四三・九五五・〇〇〇ポンドに達した事を報告して、議會の聽衆を喜ばせた。その時、彼は稍や誇張して、『貧乏』について語つた。曰く『あの、絶えず困窮の淵に臨んで居る所の人々』……『あの、上りつこのない賃金』……『十中の九まで、單なる生存競爭である所の』『人生について考へよ。』然し彼はその時、アイルランドの人民が、北方では機械の爲に、南方では羊の爲に、次第に多くその地位を奪はれ、而もその羊すらがこの不幸の土地に於いて、人間ほど急速ではないが、段々減少しつゝある事については、語らなかつた。彼は又、上流一萬人士の最高の代表者等が、急激なる恐怖の襲來に面して漏した所の言葉を、繰返しはしなかつた。

恐慌が喉締事件(イ)の爲にその高潮に達した時、上院は追放と懲役について研究すべく、調査委員會を設置したが、その報告を含む所の、一八六三年發行の尨大なる青書の中に於いて、最惡の犯罪者たるイングランドとスコットランドの囚人が、その二國の農業勞働者に比べて、ヨリ少き勞役を課せられ、そして遙かにヨリ善き榮養を與へられて居るといふ眞相が表明され、それが公務上の事實と計數に依つて立證された。まだそればかりでない。アメリカ合衆國の内亂がランカシ

ヤアやチエサイヤの工場勞働者を街上に放りだした時、その同じ上院は、その工業地帶に一醫師を派遣して、『饑餓病防止』の爲に、平均的に必要なる、炭素と窒素の極少量を、最廉最粗の食物の形に於いて發見すべき使命を附與した。その醫務官たるドクトル・スミスは、平均一週間に二萬八千グレーンの炭素と、一萬三千三百グレーンの窒素が大人男子一人をカツ〳〵飢餓熱の水平線以上に保つに足る事を言明し、そして更に又、棉花勞働者が缺乏に迫られて取る所の粗食が、殆んどこの最小限に等しい事を發見した。所が注意せよ！、この同じ博學なるドクトルが、後に又、樞密院の醫務局から命令されて、勞働階級の下層部に於ける生活狀態の研究に從事した。彼の調査の結果は、議會の命令に依つて、本年度内に發行された、『公衆健康第六報告』の中に含まれてゐるが、彼は一體、何を發見したか。それは卽ち、絹織工、婦人服裁縫師、手袋工、靴下工、その他の勞働者が、平均して、棉花工の品切手當ほどの物すらも受けて居らず、カツ〳〵飢餓熱を防ぐに足るだけの、炭素と窒素の最少量すらも、與へられて居ないといふ事である。

（イ）英國、殊にロンドンに於いて、一八六〇年代の初に追剝が流行し、それが遂に突然背後から通行人に飛びついて、その喉を締めるに至つた。それが『喉締事件』である。

『おまけに、』我々は猶この公務的報吾を引用する。『取調を受けた農業勞働者の諸家族中には、

その食物を必要炭素量の五分の一以上、必要窒素量の三分の一以上を缺いでゐる者のある事、及び三個の州（バークシャア、オクスフオードシャア、サマセットシャア）に於いては、全教區の平均食量が右の所要量を含んで居なかつた事が、發見された。』

『故に我々は銘記せねばならぬ。』右の報告は更に續く。『食物の缺乏は、大なる抵抗の後、初めて之に堪へ得るものである事、人は皆、多くの他の必須事を犧牲にした後、初めて飢餓食に落ちるものである事を。……清潔といふ事すらも、斯様な事情の下に在つては、甚だ贅澤であり、厄介である。從つて、自尊心からして清潔を保持しようとする努力が爲される時、その結果は即ち更に痛烈なる飢の苦しみである。そして、我々の今こゝに語りつゝある、この貧乏が決して怠惰の報いとしての刑罰でなく、それがあらゆる場合、全國民の勞働分子の貧乏である事を知る時、我々は殊につらい思ひをするのである。だから、不足な食量を以て償はれる勞働は、それこそ本當に、無限の程度にまで膨脹させられて居るのである。』猶この報告は次の如き、特別な、意外な、事實を含んで居る。『英國の四地方、』イングランド、ウエールス、スコツトランド、アイルランドの中、最も肥沃な部分たるイングランドの農業民が、榮養に於いて遙かにヨリ勝れて居る事、けれども又、バーク シャア、オクスフオードシャア、サマセット シャアの農業 勞働者です

ら、ロンドンのイースト・エンドの自宅熟練勞働者の大群に比べて、ヨリ善く給養されて居る事。』

右は、自由貿易の治世千年間に於いて、大藏大臣が下院に通牒して、英國勞働者の平均狀態が、あらゆる國、あらゆる時代の歴史に於いて、未だ曾て認められなかつたほどの、非常な程度にまで改善されたといふ事實を擧げた時、卽ち一八六四年、議會の要求に依つて發表された所の正式資料である。

然るに、同じく正式の『公衆健康報告』の無愛相な評語が、この正式の祝辭と調和しない。曰く『一國の公衆健康とは、國民全群の健康を意味する。然るに國民の全群は、それの最下層が所要程度の幸福に達するまで、決して健康だとは云はれない。』

然るに大藏大臣は、その『國富の增進』、その眼前に舞踏する統計表に眩惑されて夢中に狂喜しつゝ、左の如く叫んで居る。

『一八四二年から一八五二年まで、我國の課稅可能收入は六パーセント增加して居る。一八五三年から一八六一年までの八年間には、後者の收入と前者のそれとを比較する時、それが二十パーセント增加して居る。この事實は、殆んど信じ難いと思はれるほど、驚くべきものである。』

……『この興奮的な、富と力の増大は、』――グラツドストーン氏は更に附加へて云ふ――『專ら有産諸階級の範圍に限られて居るのである。』

所で諸君は善く知つて居られる。この專ら有産諸階級に限られた所の『富と力の興奮的な増大』が、如何なる健康の傷害と、道德の破壞と、精神的の墮落との間に於いて、勞働階級から生産されたかといふ事を。最近の『公衆健康報告』を見れば、裁縫師や、印刷工や、婦人菓子勞働者の職場に關する記事に於いて、右の事が充分に明示されて居る。更に一八六三年の『小兒勞働委員會報告』を見れば、次の如き記事がある。

『陶器勞働者の職業は、――これは男女兩方に當てはまるのだが、――人に對して、肉體的の、及び心理的の、惡影響を及ぼし、結局、墮落に導くものである。』……不健康な小兒は、『後に不健康な大人になる。』……『全社會の累進的墮落は不可避である。』從つて若しその工業民に對する、隣接町村からの不斷の補充が無かつたなら、そして又、工場勞働者と、ヨリ健康な他部人民との結婚が無かつたなら、スタツフオードシヤア人の墮落退化は、今より遙かに甚だしかつたであらう。』

猶、『パン燒職人の苦情』に關する、トレメンヒヤの『青書』中の記述を見よ。

工場監督官の、この一見、矛盾した報告や、或は又、死亡者名簿が與ふる所の、一層啓發的な報道や、――即ちランカシヤアの勞働者の食物がホンの飢餓手當に引下げられた時、彼等がそれと同時に、棉花不作の結果として、棉花工場から出された爲、その健康が却つて實際に改善されたといふ事、及び小兒の母親達が、追々に、ゴツトフレイの阿片劑を使はないで、自分の乳を子供に飲ませる時間の餘裕を持つた爲に、小兒の死亡率が減少したといふ事などに對し、誰か身震ひを禁じ得る者があるだらうか。

扨、これからメダルの裏を見よう!。一八六四年七月二十日、下院に提出された『所得及び財産稅名簿』の示す所に依れば、五萬ポンド、或はそれ以上の年收を有する者が、一八六二年四月五日から一八六三年四月五日までの期間に於いて十三人を增加し、その總數が一年間に六十七人から八十人に上つて居る。

右の名簿は又、凡そ三千の人々が、凡そ二千五百萬ポンドの年收、即ちイングランドとウエールスの農業勞働者全體の總收入と殆んど匹敵する金額を、分配するといふ事實を暴露した。一八六一年の統計を見るに、イングランドとウエールスの男性地主の數が一八五一年の一萬六千九百三十四人から、一八六一年の一萬五千六十六人に減じた事、從つて土地所有の集中が、十年間に

十一パーセントだけ前進した事が現はれて居る。そこで若し、少數人の手中に於ける土地所有の集中が、從前どほりの同じ歩調を以て進みつゞけるものとするならば、昔しローマ帝國の時、ネロ帝が侮蔑の哄笑を以て、アフリカ洲の半分が六諸侯の所有に過ぎない事を發見したのと、正に同一の名策を以て、直ちに土地問題が單純化されるであらう。

我々が、この『信じ難いと思はれるほど驚くべき』事實について、斯樣に永々と語つたのは、實に英國が商業的および工業的のヨーロッパに對し、その先頭に立つて居るからである。僅かに數月以前、佛國王ルイ・フイリップの追放の子の一人が、英國の農業勞働者に對して、彼等が對岸(即ち佛國)の、利得の少ない同僚に比べて、遙かに良好の地位に在ることを祝賀したのは、まだ諸君の記憶に新たであるだらう。そして實際の所、稍や異なつた地方色と、一まわり小形の裝置とを以て、英國の諸現象が、大陸の、あらゆる工業的、進歩的の諸國に繰返されるのである。一八四八年以後、それら諸國の總てに於いて、工業の未曾有なる發達があり、曾て見た事のない輸出入の增加があつた。又それら諸國の總てに於いて、『專ら有產階級の範圍に限られた、富と力の增加が、眞に昂奮的で』あつた。我々はそれらの諸國に於いて、英國に於けると同じく、勞働階級の小數者に取つて、實質賃金——即ち貸幣賃金で買ひ得られる所の生活必需品の分量——の些少

な騰貴があるのを見る。但し大抵の場合、貨幣賃金の騰貴は、幾許も福利の實體的增加を意味するものでないこと、例へばロンドンの救貧院や孤兒院の入院者が、その最低の慾求を充たす費用として、一八五二年には七ポンド、七三リング、四ペンスで足りたのに對し、一八六一年には九ポンド、十五シリング、八ペンスを要すると云ふのと同じである。

斯くて到る處、勞働階級の大群は、—少なくとも、上流諸階級が社會層を昇るのに比較して、—いよ〳〵ます〳〵窮境に沈むのである。從つて今やそれが各國の眞理となり、あらゆる偏見なき人士の前に於いて、左樣に實證されて居るのである。只それを拒否する者は、次の如き虚僞の期待に依つて他人を誤り導く事に興味を感ずる者のみである。即ちその虚僞の期待とは、機械が如何に完成されようとも、科學が如何に工業に應用されようとも、交通機關が如何に改善されようとも、如何なる新植民地も、如何なる移出民も、如何なる新市場の開拓も、如何なる自由貿易も、及びそれら總ての事物の併合も、決して勞役民衆の貧窮を除き得るものでなく、むしろ、それに反し、現今の間違つた基礎の上に在つては、勞働生産力のあらゆる新發展が、必ず階級間の溝を廣げ、社會的反目を高める事に歸するといふのである。然るに、この經濟的進歩の昂奮時期に於いて、餓死なる者が、英國の首都に於ける、殆んど一個の社會制度として、自ら進んでその

列に加はつたのである。恐らくこの時期は、世界歴史の年報中に於いて、商工業恐慌として知られたる、あの社會的疫病の、一段猛烈な經過であり、一段廣汎な範圍であり、一段殘忍な結果であるとして、特色づけられるであらう。

一八四八年の革命の流産の後、歐洲大陸に於ける勞働者諸黨の、總ての團體と機關紙は、皆な假借なき暴力の行使に依つて鎭壓された。進歩的な勞働の子等は皆な失望して大西洋外の共和國に逃れ、そして短命な自由の夢は、産業的熱病時代と、道德的沈滯時代と、政治的反動時代の中に消え去つた。大陸の勞働階級、――それは或る部分に於いて、英國政府の外交から援助されて居り、そしてその英國政府は、當時も今日と同じく、セント・ペテルスブルグの內閣と密接な提携を爲して居たのだが、――そこでその勞働階級の敗北は、直ちにその傳染的影響を海峽のこちら側（即ち英國）に及ぼした。英國の勞働者は、大陸の兄弟の敗北に落膽して、自力の信仰を失つたが、その敗北が一方には、先に稍や動搖した、地主と金持の自信力を更に回復させた。彼等は厚顏無恥の態度を以て、既に公表した特許權をも取消した。新らしい金鑛の發見はおびただしい移民を生じ、それが英國のプロレタリアの陣列に、再び補ひ得ざる隙間を殘した。先に最も精力的であつた、殘餘の勞働者も、今は一時的の厚遇と高給との餌に腐敗させられて、『現狀を考慮に入

れ』つゝ活動した。從つてチャーチスト運動を回復し、或は再組織しようとする總ての計畫は、全く失敗した。勞働階級の機關紙は大衆の支持を失つて順次に滅亡した。實際、英國の勞働階級は、以前とは丸で違つて、今落入つて居る所の、政治的無力の地位を以て、全く滿足してゐるものの如く見えた。若し以前に、英國の勞働者と歐洲大陸の勞働者との間に、何ら行動の共通性が無かつたとするならば、今ではそこに、とにかく、敗北の共通性だけがあつた。

然し、一八四八年の革命以來の、この期間も、やはり光明の一面が無いではなかつた。我々はこゝに二大事件を回顧する。最も感嘆すべき執拗さを以て行はれたる、三十年間の鬪爭の後、英國の勞働階級は、地主と金持との間の一時的分裂を利用して、十時間勞働法案を通過させることが出來た。工場勞働者がこの法案から受けた所の、肉體的、道德的、及び精神的の大利益は、當時の工場監督官の半期報告に依つて、之を證明し得るのであるが、それが今は各方面に於いて承認されてゐる。歐洲大陸の大抵の政府は、今やこの英國工場法を、多少變化した形體に於いて採用する事を餘儀なくされてゐる。そして英國々會自身、年々この法律の勢力範圍を擴大すべく强制されてゐる。所が勞働の取締についての、この法律の實際的重要性を別にして、この法律の顯著な成功には他のモット、モット高い意義が存して居る。ブルジョアジーは、ユール博士、シニ

オル教授、その他諸賢人の仲介に依り、最も有名なる學問的機關紙の上に於いて、早くから聲明書を發し、大滿足を以て次の事を立證した。曰く、英國の工業に對する、あらゆる勞働時間の法律的制限は、工業の吊鐘を鳴らすものであつて、工業は實に只、人間の血、殊に小兒の血を吸ふ事に依つてのみ、惡鬼的に存在し得るものであると。昔は、小兒殺しがモーロツク宗の秘密式であつたが、それも恐らく一年に一度、大祭の折にのみ、行はれたものであり、殊に又モーロツクの神は、必ずしも貧者の子を好んで取り食つたわけではなかつた。

勞働時間の法的制限に對する、この鬪爭は、個々の雇主の强慾を制止する事は姑く別として、それがブルジョアジーの經濟學たる需要供給法則の盲目的支配と、勞働階級の經濟學たる、生產の社會的統制主義との間に於ける、大反目に對して、現實の干涉を試みた時、その鬪爭がいよ〳〵ます〳〵猛烈になつて來た。そしてそれ故にこそ、十時間勞働法が單に一個の政治的大進步と云ふばかりでなく、同時に又、主義上の勝利であつた。即ち、この時はじめて白日の下に於いて、ブルジョアジーの經濟學が、勞働階級の經濟學に負かされたのであつた。

所が、まだ、資本の經濟學に對する、勞働の經濟學のモツト大きな勝利が、我々の眼前に横たはつてゐる。即ち共同組合（コオペラチーヴ）の運動、殊に或る無鐵砲な『職工等』が、少しも

他の援助を借りないで設立した所の、共同組合の工場がそれである。この社會的大實驗の價値は恐らく滅多には、充分の評價を附され得ないだらう。それらの勞働者は、議論に依つてではなく實行に依つて、今や大規模の、そして近代科學の進歩と調和する生産が、職工階級を雇用する支配階級の存在なしに行はれ得ることを立證した。彼等は又、工業の果實を收得する爲には、必ずしも勞働の手段が、勞働者を支配し搾取する手段として、獨占されねばならぬわけではない事、賃金勞働が、奴隷制や農奴制と同じく、暫時的の、附隨的の社會形體であつて、それは、新らしい協力勞働が、欣然たる手と、剛健な心と、快活な情とを以て、その事業を成就するより以前に消滅すべき運命を持つてゐる事を立證した。英國では、この共同組合の種がロバート・オーエンに依つて播かれてゐた。大陸に於けるこの勞働者の實驗は、實に右の――、一八四八年に發見されたのではないにしても、とにかくその時に聲高く布告された所の、――その理論の實行的成果であつた。

同時に、一八四八年から一八六四年までの期間に於ける經驗は、疑ひもなく次の事、(それは一八五一年と一八五二年に於ける、勞働階級の最も聰明なる指導者等が、既に英國の共同組合運動について考へてゐたもの)[ロ]を立證してゐる。即ち共同組合勞働が如何にその原理に於いて正確で

あり、又その實行に於いて有益であらうとも、それはまだ、分立した勞働者の小團體に於ける折々の實驗に限られてゐるので、幾何學的に前進する獨占の增大を阻止するに必要な力を得ることも出來ず、又民衆を解放することも出來ず、又その貧困の重荷を相當に輕減するだけの事すらも出來ないのであつた。そしてそれが多分、或種の貴族や、ブルジョアジーの博愛的談論や、經濟學の狡猾な商人すらもが、急に廻れ右をして、この同じ共同組合主義に對し、――以前にはそれを單なる夢想者のユトピヤとして嘲笑し、或は社會主義者の異說として排斥し、それを、無効ではあつたけれども、若芽の中に殺さうとしたくせに、――今は厭々ながらの素振で、それに媚を呈してゐる理由である。共同組合が勞働者を解放する爲には、それが先づ全國的規模に發展する事が必要であり、從つて又、國家の資力に依つて進行させられなければならない。もちろん、地主や金持は自己の獨占の防禦と永續との爲、頑强にその政治的特權の行使を續けるであらう。從つて彼等は、勞働者の釋放を進めるどころか、あらゆる可能な妨害をそれに與へることを努めるであらう。だからアイルランドの農民地主の權利の擁護者たるパルマアストン卿は、最近の議會開會日に於いて、その心の底から語勢强く叫んで云つた。『國會は卽ち地主議會である』と。

（ロ）この括弧內の一節は、最初の英語の原文に無く、後のドイツ譯に於いて、初めて現はれたものである。

故に、××××することが、今や勞働階級の大義務である。そして彼等は既にそれを理解したと見えて、英、佛、獨、伊の諸國に於いて、同時に復活的興奮（リヴァイヴァル）の徴候が現はれ、勞働者黨の政治的結成が、今その諸國内に計畫されつゝある。

勞働者は成功の一要素を持つてゐる。彼等の大多數なる事がそれだ。然し大衆は、組織を持たされ、聰明な指導を與へられた時にのみ、初めて强壓の力を生ずる。從來の經驗の示す所に依れば、同胞兄弟の團結、――それに依つてこそ、諸國の勞働者をあらゆる自由の戰ひに結合せしめ、相依り相助けるの心情を激勵するのであるが、――その團結を輕視した事が、いつも無秩序な行動の失敗を招いて、勞働者に對する刑罰となるのである。斯くて、この事態の認識に迫られて、一八六四年九月二十八日、諸國の勞働者がセント・マルテンス館に公集會を催して、今こゝに國際協會を設立したのである。

外にまだ一つ、この集會を鼓舞する精神がある。若し諸國の勞働階級の解放といふ事が、その勞働階級の兄弟的協力を要求するのであるならば、それほどの大目的が、――今この、醜惡なる目的の遂行の爲に向けられてゐる外交政策、即ち國民の偏見を助成し、泥棒的手段を以て人民の財と血を濫費するが如き政策の行はれて居る時、――どうしてそれほどの大目的が達せられるで

あらうか。それは決して支配階級の智慧に依るのでなく、實に只、英國勞働階級の英雄的な反抗が、大西洋の對岸に於ける奴隷制の永續と延長との爲に遠征軍を送ることの恥辱から、我が西部歐洲を救濟したのである。

ロシヤがコーカシヤの山地を併合した事、及び勇敢なるポーランドを暗殺した事に對し、歐洲の上流階級が、恥知らずの稱讃や、似せものの同情や、或は愚鈍な冷淡さを以て、それを迎へた事。又この、セント・ペテルスブルグに首府を持ち、歐洲の各國政府に勢力を握つてゐる所の、この（ロシヤの）野蠻力が、兇暴な、不敵な、侵略を行つた事。この二事が勞働階級に對して、國際政治の秘密をつかむ事、自國政府の行動を監視する事、及び必要な場合には、自己の動かし得べき、あらゆる力を集中して、その行動に抵抗する事が、自己の任務であることを敎へたのである。そして、又支配階級の、これらの計畫が水泡に歸した時、勞働階級は提携して先頭に立たねばならぬ事、そして個人關係に於いて正當と認められる所の、道德や正義の單純な原則が、國際關係を支配する最高法則として承認されねばならぬといふ、共同要求を提唱すべきである事を敎へたのである。斯樣な外交政策に對する鬪爭が、やはり勞働階級解放の一般的鬪爭の中に含有されて居るのである。――萬國の勞働者團結せよ！。

ゴーダ綱領批判（一八七五年）

Zur Kritik des sozialdemokratischen Programms von Gotha (1875)

カルル・マルクス

まへがき（譯者）

一八七五年五月、ドイツに於ける社會黨の二派（ラッサーレ派とアイゼナハ派）がゴータ市（Gohet）に合同大會を開いて、『ドイツ社會主義勞働黨』となつた。それが後の『ドイツ社會民主黨』である。

この二派の中、ラッサーレ派は早くから存在して、可なり優勢であつたが、その理論上の立場は、例のラッサーレ一派の、甚だ曖昧不徹底なものであつた。アイゼナハ派はベーベル・リープクネヒト等に依つて代表されたもので、云はゞマルクス・エンゲルス系であつた。然るにこの二派が合同する時、妥協の必要上、アイゼナッハ派は頗る多くラッサーレ派に讓歩すること

とを餘儀なくされた。

それで當時、ロンドンに居たマルクスは、この合同大會に提出される筈の綱領草案を見て、大過失が將に遂行せられんとして居るものと爲し、その遂行を阻止しようとした。マルクスとしては曖昧な妥協的綱領を採用するに忍びないので、綱領の事は姑くその儘にして置いて、とにかく團體の合同を急ぐ樣に勸告した。そして綱領草案に對しては、手嚴しい批判をして、それをアイゼナッハ派の主なる人々に送つた。それが卽ち次に記す『ドイツ勞働黨綱領評註』で、後にそれが普通に『ゴータ綱領批判』と呼ばれる事になつた。

所が、マルクスのこの手紙は、リープクネヒト等の間に大恐慌を起させた。若しこの手紙を公表すれば、永いあいだ期待していた合同談は忽ち破れてしまふ。第一、ラッサーレ派の感觸を傷つけるし、第二には、アイゼナッハ派内の合同反對分子が騷ぎだすに極まつている。そこで止むなく、この手紙を秘しておいて、合同談を進める事になつた。そしてマルクスに對しては、ドイツ國内の事情をロンドンから正確に觀察する事は出來ないわけだから、マルクスの意見は充分尊重するけれども、この場合、それに從ふわけに行かないと云ひ送つた。『マルクスは貴いが、黨は一層貴い』と、リープクネヒトは當時の苦衷を語つている。かくてこの綱領草案

は、ゴータ大會で多少の修正を加へられていよ〳〵ドイツ社會主義勞働黨の綱領となつた。それから十五六年の後、一八九一年のハルレ大會で、このゴータ綱領の修正が議題に上り、更に同年のエルフルト大會で、初めてドイツ社會民主黨の新綱領（卽らェルフルト綱領）が採用された。そしてそのハルレ大會の開會前、エンゲルスが初めて、このマルクスの『評註』を、黨の機關雜誌『ノイエ・ツアイト』第九卷第十八號に發表した。その時、マルクスは旣に死んでいた。

こうした由來を持つ所の、この『ゴータ綱領批判』は、最も貴重なマルクス文書の一つとして、學者研究者の間にも、實際運動者の間にも、種々の意味に於いて甚だしく尊重されている。殊に世界戰爭以後、ロシヤ革命以後に於いて、最も然りである。

マルクスは初め、ゴータ綱領のいよ〳〵採用された時、その妥協の結果として將來に起るべき、あらゆる禍害と不祥事とを豫言したのであつた。然しその後に於けるドイツ社會黨の成功の爲、このマルクスの『批判』を握りつぶしたのが、却つて聰明な行動であつたといふ事になり、マルクスとエンゲルスの不機嫌も自然に解けて來たのであつた。

所が、マルクスの豫言したその不祥事が一九一四年八月になつて遂に起つて來た。即ち世界

大戰爭の試練に依つて、社會黨の右翼が遂にその馬脚を現はした。マルクスの『批判』を理論に拘泥したものとして嘲けるのは、大間違ひである。理論の差異は卽ち態度の差異である。この『ゴータ綱領批判』が特に今日に於いて重要性を有する所以は、卽ちそこに在る。

本篇には水谷長三郎氏の譯本(京都弘文堂發行)もある。私の譯文もそれに負ふ點々がある。私の譯文は最初、大正十年十月の『社會主義研究』に載せ、後に幾度も訂正を加へた。無產社パンフレットの一冊として發行された事もある。

本篇には次の六文章が附錄になつている。附錄の方から先に讀んで貰ふのが順序かも知れない。(以下本文中の六號活字は、總て譯者の解說的附加である。)

一、綱領評註添書……マルクス
二、綱領評註公表の添書……エンゲルス
綱領草案について(ベーベル宛)……エンゲルス
四、合同の結果について(ベーベル宛)……エンゲルス
五、合同の結果について(ブラッケ宛)……エンゲルス
六、ゴータ綱領全文……

ドイツ勞働黨綱領評註

Randgorssen zum Programm der deutchen Arbeiterpartei

一

（1）（富の源、勞働收得の全收）

『勞働は總ての富、及び總ての文化の源である。そして有益の勞働は社會に於いてのみ、及び社會に依つてのみ、可能であるのだから、勞働の收得は、平等の權利として、悉く社會の全員に屬する。』（これは綱領草案の第一節で、ゴータ大會で採用された本文は、少しく修正されて次の如くなつてゐる。「勞働は總ての富、及び總ての文化の源である。そして一般に有益の勞働は社會に依つてのみ可能であるのだから、勞働の全收得は社會、卽ち社會の全員に屬し、その全員は一般勞働義務を負ひ、各自相當の欲求を充たすべき平等の權利を持つ。』――以上および以下とも、六號活字は總て譯者の補註である。）

右の個條の最初の部分。『勞働は總ての富、及び總ての文化の源である。』（これが第一、間違つてゐる。）

勞働は總ての富の源でない。自然も勞働と同じ程度に於いて、使用價値の源である。（そして物

質上の富は實にこの使用價値から成立つて居るのである！）。そして又、勞働その者が一つの自然力（即ち人間の勞働力）に過ぎない。（だから勞働が總ての富の源だと云はれない。）右の引用句は、兒童用の有らゆる初學本の中に書かれてあるが、それは只、勞働が自己所屬の勞働對象物と、勞働手段（器具、機械等）とに依つて行はれるものだと想定される限りに於いて、正當である。けれども社會黨の綱領としては、こういふブルジョア的語法を許すべきでない。即ち、こういふ條件に依つて初めて其の言葉に意味が生ずるといふ程の、其の條件を默秘して置くべきでない。もと〳〵人間が、有らゆる勞働手段と勞働對象物との第一の源たる自然界に對して、所有者として立つ限り（即ち、それを自分の所有物として取扱ひ得る限り）に於いて、其の勞働が使用價値の、從つて又富の、源となるのである。（然し）ブルジョアとしては、この勞働に超自然的な創造力をクツつけるべき、立派な理由を持つてゐる。ナゼと云ふに、勞働が自然の爲に制約されるものだとすれば、（即ち、勞働が自然に依存してゐるものだとすれば）、自分の勞働力以外に何物も所有せぬ人間は、有らゆる社會狀態および文化狀態に於いて、外物的勞働條件（原料、機械、道具等）の所有者になつてゐる所の、他人の奴隷になるより外はないといふ結果を生ずる。即ち其の奴隷は只、他人の許可の下にのみ働く事が出來、從つて又、他人の許可の下にのみ生存する事が出來るといふ事に

なる。（それでは、その所有者たるブルジョアが奴隷存在の責任を負はねばならぬ事になるから、それで彼等は勞働に神秘的な力をクツつけて、總ての富の源だと云ふのである。）

然し今は姑らく、此の提言を勝手に獨り歩かせ（或は寧ろ、勝手にビツコを引かせ）て置かう。所で一たい、彼等はこの提言からどんな結論を豫期したのか。それは明かに斯うである。

『勞働が總ての富の源であるのだから、社會の各員は勞働の收得としてより外に富を獲得する事は出來ない。故に、誰でも自ら勞働しない者は、他人の勞働に依つて生活し、他人の勞働を犧牲にして自己の文化を享受するわけである。』

所がそうでなく、直ぐその次に『そして』といふ曖昧な接續詞を使つて、第二の提言をそこに結びつけ、そしてその第二の提言から、（第一の提言からではなく）、結論を引出してゐる。

右の個條の第二の部分。『有益な勞働は社會内に於いてのみ、及び社會に依つてのみ、可能である。』

第一の提言に依ると、勞働は總ての富、總ての文化の源である。從つて社會は、勞働なしには不可能である。然るに、こゝではそれに反し、『有益な勞働は、社會なしには不可能だ』と聞かされる。

そんな事を云ふほどなら、斯うも云へる筈である。即ち、社會に於いてのみ、無益な勞働、及び有害な勞働すらも、産業の一部門となり得る。又、社會に於いてのみ、人間はノラクラと生活する事が出來る。つまりこの筆法で行けば、ルソウ説の全部を剽窃して來る事も出來るわけだ。

（ルソウは社會と個人との關係について、想像的な、勝手な事を説いて居るのだが、此の綱領のような事を云ふ程なら、そのルソウ説を皆んな持つて來て並べてもいゝといふ位の冷かしだらう。）

それに、『有益な』勞働とは何んの事か。目的の効果を持ち來す勞働といふだけの意味だらう。然らば野蠻人が、―人間が猿でなくなつた時には即ち野蠻人なのだが、―それが石で或る動物を殺したり、或る果物を切り取つたりする時、それは即ち『有益な』勞働を行つたのである。（して見ると、社會に於いてでなくて、有益な勞働が出來るぢやないか。）

第三、結論。『そして有益な勞働は社會に於いてのみ、及び社會に依つてのみ可能であるのだから、勞働の收得は、平等の權利として、悉く社會の全員に屬する。』

結構な結論だ！。若し有益な勞働が社會に依つてのみ、可能であるならば、勞働の收得は社會に屬する（譯である）そして勞働の『條件』（即ち社會）を維持するに必要な分より以上だけが、各勞働者に渡される（事になる）。

實際、この提言は、いつの世でも、當時の社會現狀の擁護者に依つて主張されている。即ち第一には政府とその一切の附屬物との要求が出て來る。政附は社會の秩序を維持する爲の社會的機關であるのだから。次に各種私有財産の要求が出て來る。各種の私有財産は社會の基礎であるのだから。その他まだ色々ある。見るべし、斯樣な空虛な文句は、どんなにでも好勝手に、曲げたり引つくり返したりされる事を。

そこで次のように言つた時に、右の個條の第一節と第二節との間に、初めて多少意味のある關係が生ずる。

『勞働が富と文化との源になるのは、一只だ社會的勞働としてのみである。』或はそれと同じ意味で、『社會に於いて、及び社會に依つてのみである。』

この提言は爭ふべからざる眞實である。なぜと云ふに、孤立的勞働は（適當な物質的條件が存在すれば）使用價値を作り出す力があるに相違ないけれども、富も文化も決して産出する事は出來ない。

所が次の提言も亦た爭ふべからざる眞實である。

『勞働が社會的に發達して、それに依つて富と文化との源になると、その度合に比例して、勞

働者の側に貧困と悲慘とが發達し、非勞働者の側に富と文化とが發達する。』

これが從來に於ける全歷史の法則である。故に『勞働』とか『社會』とかいふ一般的な言ひ方をするよりは、現在の資本家社會に於いて、勞働者にその社會的惡運を破棄すべき力を與へる所の、又その破棄を强要する所の、物質的その他の諸條件が、如何にして今日遂に發生してゐるかを、こゝでハツキリ論證すべきである。

然し實際を云へば、文章上および內容上、缺點だらけのこの個條は、全部たゞ、ラツサーレ派のお題目たる『勞働收得の全收』を、黨の標語として黨旗の上に揭げたい爲である。この『勞働の收得』とか『平等の權利』とかいふ事については、同じ言葉が後に稍や變つた形で繰返されている所で、再び論ずる事にする。

（2）（勞働手段の獨占）

『今日の社會に於いては、勞働手段は資本家階級の獨占である。その結果として生じた、勞働階級の從屬が、有らゆる形式に於ける貧困と屈從との原因である。』（この個條はゴータ大會に於いて無修正で採用された。）

この個條は『インタナショナル』の規約を借りて來たものだが、その『訂正』が誤謬を生じてゐる。（「インタナショナル」は即ち第一インタナショナル、國際勞働者協會の事。）

現今の社會に於いては、勞働手段は、地主と資本家との獨占である。（土地所有の獨占は實に資本獨占の基礎である。）インタナショナルの規約では、この節に相當する個所で、獨占者のどの階級といふ事を明示して居らぬ。只『勞働手段、即ち生活の源の獨占』としてある。この『生活の源』といふ副言葉が、勞働手段の中に土地の含まれてゐる事を充分に示してゐる。

そこで右の訂正が加へられたのは、ラッサーレが、今では一般に知れわたつた理由の爲に、地主を攻擊せずに、資本家ばかりを攻擊したからである。イギリスでは、資本家が自分の工場の立つてゐるその土地の所有者である場合は、滅多にない。

（3）（勞働の收得、「正當な分配」）

『勞働者の解放の爲には、勞働手段を社會の共有財産に高める事、及び社會の全勞働を組合的に處理し、その勞働收得を正當に分配する事が肝要である。』（大會で決定した文句は、「勞働者の解放の爲には、勞働手段を社會の共有財産に變換する事、及び社會の全勞働を組合的に處理し、その勞働收得を共同

の利益の爲に使用し、及び正當に分配する事が肝要である。」）

『勞働手段を共有財産に高める』とあるは、『共有財産に變換する』とすべきだが、それは大した事でもない。

『勞働收得』とは一體何んだ。勞働の生産物の事か、それとも其の價値の事か。又後者の場合とすれば、生産物の總價値の事か、それとも勞働がその使用した勞働手段の價値の上に新にに附加した部分價値の事か。

『勞働收得』とは、ラッサーレが使用した曖昧な言ひ方で、正確な經濟的概念を持つものではない。

『正當の分配』とは何んだ。

ブルジョアは、現今の分配が『正當』だと主張して居るではないか。又實際、現今の生産方法を基礎とする以上、それが唯一の『正當』な分配ではないか。經濟關係は法律觀念に依つて支配されるのか。そうではなく、法律關係が經濟關係から發生するのではないか。（だから現代の法律上では、現代の分配が「正當」なのだ。）又社會主義の諸派の間には、『正當』な分配について種々雜多の考案があるではないか。（正當なんて馬鹿な話だ。）

この『正當な分配』といふ一句の中に、如何なる意義が含ませてあるかを理解する爲には、第一個條と第三個條とを對照する必要がある。第三個條では『勞働手段が共有財産であり、全勞働が組合的に處理される』社會を擧示してゐるが、第一個條では『勞働の全收得が平等の權利として社會の全員に屬する』事を說いてゐる。

『社會の全員』？。それには『勞働せぬ者』をも含むのか。それなら『勞働の全收得』といふ事はどうなるか。（勞働せぬ者にも分配をするとなれば、勞働する者がその勞働全收得を取る事は出來ないわけぢやないか。）それとも勞働する社會員の事だけか。それなら又、社會全員の『平等の權利』といふ事はどうなるか。

勿論、『社會の全員』と云ひ、『平等の權利』と云ふのは、單に文飾である事は分つている。そしてその本意の在る所は、此の共産社會に於いては、各勞働者が、ラツサーレの謂ゆる『勞働の全收得』を受取らねばならぬと云ふのである。

所で先づ、この『勞働收得』といふ言葉を、勞働の生産物として考へて見ると、その組合勞働の收得は社會的の總産物である。

扨その中から引去るべき者は、

第一、消費された生産手段の補充分。
第二、生産擴張の爲に要する添加分。
第三、諸種の災害や、天變地異等に依る生産の混亂等に對する豫備積立、若しくば保險積立。
これらのものを『勞働全收得』の中から引去る事は經濟的必須である。そしてその引去の分量は、現存せる諸種の手段と力とに依り、又一部分は蓋然率に依つて決定されるのだが、然しそれは決して正義公平の觀念に依つて算出されるものではない。
そこで總産物の殘る部分が消費資料に充てられる事になる。
けれども、個人的分配をする以前に、まだ引去るべき者がある。
第一、生産に屬しない、一般の行政費。
この分は固より、今日の社會に比べて著るしく減少するであらう。そしてその減少は新社會の發達する程度に相應して進むであらう。
第二、例へば學校、衛生設備などの如き、慾望の共同的充足に宛てる分。
この分は固より、今日の社會に比べて著るしく增加するであらう。そしてその增加は新社會の發達する程度に相應して進むであらう。

第三、勞働不能者等に對する費用。つまり今日の謂ゆる貧民救助費に當る。

こゝで初めて分配の段取になる。綱領はラッサーレ派の影響を受けて、偏狹にも分配の事ばかり考へてゐるのだが、その分配、即ち組合社會内の各生産者の間に消費物を分配する段取が、こゝで初めて起る。

『勞働の全收得』はもはや明かに『部分的收得』に變じてゐる。尤も、一私人の資格としての生産者から取去られた物が、更に社會の一員たる資格としての同人に對し、直接或は間接に戻つて來るのではあるが。

かくて『勞働全收得』といふ言葉が消え失せたと同じように、今度は『勞働收得』といふ本の言葉も消え失せて了ふ。生産手段の共有の上に立つ組合社會の内部では、生産者は自分の生産物を交換するものではない。そこではモウ、生産上に費されてゐる勞働がその生産物の價値として現はれない。即ちその生産物の有する物的性質として現はれない。なぜと云ふに、今では資本家社會と違つて、個人の勞働がもはや間接に存在して居るのでなく、社會の總勞働の構成分子として直接に存在して居るのだから。斯くて『勞働收得』といふ言葉は、今日既にその曖昧な語義の爲に批難さるべきだが、それが更に全く意義を失つてしまふ事になる。

我々がこゝに問題とするのは、自己獨立の基礎から發達したものとしての共産社會ではなく、それとは反對に、資本家社會から今正に發生するものとしての共産社會である。故にその社會は有らゆる點に於いて、經濟的にも、道德的にも、智識的にも、まだ先頃まで宿つて居たその舊社會の痕跡を背負はされてゐる。從つて個々の生産者は、前記の引去の濟んだ後、自分が社會に與へただけのものを精密に取返す事になる。彼が社會に與へたものと云へば、即ち彼の個人的の勞働量である。實例を以て云へば、社會の總勞働時間は個人の勞働時間の總計から成立つ。各生産者の個人的勞働時間とは、社會の總勞働時間に對して、彼が寄與しただけのその部分である。即ち總勞働時間に於ける彼の持分である。彼は（その勞働の中から共同積立に對する分だけ引去られた後）、是々の勞働を寄與したといふ證書を受取る。そしてその證書を以て消費物品の共同倉庫から、その勞働量に相當するだけの物品を引出す。即ち彼は一の形に於いて社會に與へた所の、その同じ勞働量を。他の形に於いて取返すのである。

こゝでは明かに商品交換と（それが等價に交換である限り）同じ原則が行はれてゐる。內容も形式も變化してゐるのは、變化した事情の下に於いて、何人も自分の勞働以外與へる物がないからであり、又一方に於いて、個人的消費物以外、何物も個人の所有になり得ないからである。け

れども、それらの個人的消費物が個々の生産者の間に分配されるといふ點に於いては、等價商品の交換と同じ原則が行はれるのである。即ち一の形に於ける同量の勞働が、他の形に於ける同量の勞働と交換されるのである。

斯くて平等の權利（即ちブルジョア的權利）が猶ほ原則となつてゐる。但し原則と實際とがこゝでは最早や闘爭しないし、又その商品交換に於ける等價の交換が、平均的にのみ行はれて、個々的に行はれてゐない。

然し、そういふ進歩はあるにしても、この平等の權利なる者は、やはりブルジョア的の制限を帶びてゐる。生産者の權利は其人の勞働給付に比例してゐる。平等とは、平等の尺度（即ち勞働）で測定されるといふ事である。

然るに甲の人は乙の人よりも、肉體的もしくは精神的に優つてゐる。從つて同じ時間内にヨリ多くの勞働を爲し、或はヨリ長く勞働を續ける事が出來る。そこで勞働が尺度となるには、その延長と强度とに依らねばならぬ。それより外に尺度となり樣がない。平等の權利とは即ち不平等の勞働に對する不平等の權利である。こゝでは總ての人が勞働者であるのだから、階級の差別はないが、自然的特權として不平等な個人的才能、從つて又、不平等な實行能力が、暗默の間に承

認されてゐる。故に平等の權利はその內容から云へば、他の有らゆる權利と同じく、不平等の權利である。凡そ權利なる者は、その本質上、同一の尺度を使用する場合にのみ成立し得る。然るに不平等な個人が、(若し不平等で無かつたら別々の個人ではないのだが)、それが平等の尺度で測られるのは、同一の視點の下に置かれた時、即ち或る極つた一方面ばかりから見られた時に限る。例へばこの場合、總ての人は皆、勞働者としてのみ見られ、その他の事は一切無視される。それに又、甲の勞働者は結婚して居り、乙は結婚して居ないとか、丙は丁よりも子供が多いとか、そのほか色々な事がある。然るにそれ等が平等な勞働給付をして、從つて消費物の共同貯藏の中から平等な分配を受けるとすれば、實際上、乙は甲よりも多くを受け、丁は丙よりも富むといふ樣な事になる。そういふ不都合を避けようとする爲には、權利は平等でなく、不平等でなければならぬ。

然しこうした不都合は、共產社會の第一階段に於いては不可避である。その共產社會は長い產みの惱みの後、ヤツト資本家社會の中から出たばかりであるから。權利なる者は、その社會の經濟的設備、及びそれに依つて生ずる文化の發達より、ヨリ高く登る事は決して出來ない。

共產社會のヨリ高き段階に於いて、即ち個人が分業の下に受けてゐる奴隷的束縛が消滅し、從

つて又、精神勞働と肉體勞働との對立が消滅する時、又勞働がもはや生活の爲の手段であるばかりでなく、勞働その者が生活の第一慾求となる時、更に又、個人の多方面な發達と共に、生産力も増大して、共有財産の有らゆる水源が十分に流れ出す時、その時はじめて狹隘なブルジョア的權利思想の水準を踏み越え、社會は初めてその旗の上に斯う書くであらう。『能力に應じて各方から取り、要求に應じて各方に與へる！。』

私が、一面に於いて『勞働の全收得』につき、他面に於いて『平等の權利』と『正當の分配』とについて、斯樣に長々と論じたのは、外でもない。第一、曾ては多少の意味を持つてゐたが、今ではモウ時代おくれの廢語になつてゐる思想を、ドグマとして我黨の上に押しつけようとする事、第二、折角これまで骨を折つて我黨の間に植えつけた現實觀を掘りくり返して、デモクラットやフランス社會主義者が喜んで喋々する、權利云々の空理空說を以てそれに代へようとする事が、如何に無茶であるかを示す爲である。

右に論じた事の外、謂はゆる分配なる者を重大視して、それに最高のアクセントを附ける事が全體の間違ひである。

いつの時代に於いても、消費物の分配は生産條件その者の分配の結果に過ぎない。然るに生産

條件の分配は即ち、生産方法その者の特質である。例へば、資本家的生産方法は、生産の物的條件が資本家的財産および土地的財産の形を以て非勞働者に屬し、そして民衆は只だ肉體的生産條件（即ち勞働力）の所有者である、といふ事實の上に立つてゐる。生産の要素が斯様に分配されてゐる以上、現今のような消費物の分配法が生ずるのは當り前である。それで若し生産の物的條件が勞働者自身の共同所有であるならば、現今と違つた消費物の分配法が生ずるのも亦た當り前である。俗社會主義者は、（及びデモクラットの一部も亦それに倣つて）、ブルジョア經濟學者に釣られて、生産方法から獨立して分配の事を考へる習慣を持ち、從つて社會主義は主として分配の事を論ずるものだと稱してゐる。然しその現實の關係（眞相）は疾くにから明示されてゐる。我々は何故に再びその昔に立戻らねばならぬか。

（4）（勞働階級と「反動群」）

『勞働の解放は勞働階級の事業でなければならぬ。これに對立する總ての他の諸階級は、只だ一個の反動群である。』（この個條は大會で修正なしに通過した。）

この個條の前半は『インタナショナル』の規約の劈頭の文句を取つて、それを『訂正』してゐ

る。原文は斯うだ。『勞働階級の解放は勞働者自身の働きでなければならぬ。』然るにこゝでは『勞働階級』が解放をする事になつてゐる。何を解放するのか。『勞働』を。誰か（これで）分る人があるか。

それにまだ惡い事には、次の文句がラッサーレ式その儘である。『これに（勞働階級に）對立する總ての他の諸階級は只だ一個の反動群である。』

『共産黨宣言』には斯う書いてある。『現今、プルジョアと對立する總ての諸階級の中で、只プロレタリアートのみが本當の革命階級である。他の諸階級は大産業の發達に共に衰亡し死滅するが、プロレタリアートは大産業の最も特殊な産物である。』

又該『宣言』では、ブルジョアジーは、大産業の維持者として、封建貴族および中産階級（廢れた生産方法の産物たる、昔しの社會的地位身分を總て維持しようとする人々）と對立する、革命階級と目されてゐる。故に貴族や中産階級は、ブルジョアジーと一緒になつて一個の反動群を作つてゐるものではない。

然るにプロレタリアートは又、ブルジョアジーに對立して革命的である。プロレタリアートは大産業の地盤の上に發生して、その生産の中から資本家的性質（ブルジョアジーが永續させよう

と努めてゐる、その資本家的性質）を剝ぎ取らうとしてゐるのだから。然し『宣言』は言ひ添へてゐる。『中産階級は……今や將にプロレタリアートの列に陷らんとする事を悟つた時、革命的となる。』

故に、この見地からしても、中産階級がブルジョアジーと、おまけに封建貴族と一緒になつて勞働階級と對立し、『只一個の反動群』を成すと云ふのは、全く無意味である。

先頃の選擧の時、我黨は獨立の職人や、小製造業者や、農民に向つて、諸君はブルジョア及び封建貴族と共に、我々と對立して只一個の反動群を成してゐる、と宣言したか。

ラツサーレが『共産黨宣言』を暗記してゐるのは、彼の信者連が彼の神聖な御書き物を暗記してゐるのと同じである。然るに彼がその共産黨宣言の文句をこれほど亂暴に變改したのは、彼が敵たる專制主義者および封建主義者と同盟してブルジョアジーに當つた事を言ひ繕ふ爲である。

更に又、右の個條に附け加へられた、ラツサーレの金言がある。それは『インタナショナル』の規約の改惡的引用の部分と何等の連絡もないのだから、寧ろ髮毛をつかんで引きずりよせたと云ふべきだ。故にこれは、この場合、單なる僭越であつて、而もビスマーク君に取つて決して不快なものでない、ラツサーレ一派の安價な不作法である。

『勞働階級は自分の解放の爲に、先づ現今の國家の埒内に働く、但しその（總ての文明國の勞働者に共通なる）努力の必然の結果が、諸國民の國際的親交となる事を自覺してゐる。』（此の個條は大會で次の如く變更された。「獨逸社會主義勞働黨は、先づ國家の埒内に働くけれども、勞働運動の國際的性質について充分に自覺してゐる。そしてその爲に勞働者に課せられる總ての義務を大膽に遂行して、人類同胞の實を擧げる事を期する。」猶この一節は次の一節と前後に置き替へられた。）

ラツサーレは、共産黨宣言に反し、又從來の總ての社會主義に反して、最も狹隘な國民的立場から勞働運動を考へた。そして我々は今、その點に於いて彼に從はうとして居るのである。而も『インタナショナル』の活動後の今日に於いて！。

苟しくも勞働階級が鬪爭しようとするには、國内に於いて階級として團結せねばならぬ事は、云はなくても分つてゐる。從つて國内がその鬪爭の直接の舞臺である事も分つてゐる。故にこの意味に於いては、階級鬪爭は國民的であるが、それは實質上の事でなく、共産黨宣言の云ふ通り、形式上の事である。然し現代の國家（例へはドイツ帝國）のワク（框）と云へば、それ自身が既に、經濟的には世界市場のワク内にあり、政治的には國際團體のワク内にある。凡そ商人なら誰でも知つてゐる事だが、ドイツの商業は即ち外國商業であつて、ビスマーク君の偉大は即ち實に

その特殊の國際政策の上に存してゐる。

ドイツ勞働黨は一體その國際主義を何處に歸着させるのか。『その努力の結果が、諸國民の國際的親交となる』といふ自覺に歸着させるといふ。この言葉はブルジョアの自由平和同盟から借りたもので、それを、支配階級とその政府とに對する共同の戰鬪に於ける、勞働階級の國際的結合と同等の者に通用させようとしてゐる。かくてドイツ勞働階級の國際的任務については、一言も語られてゐない！。そして彼等は、この有樣で、自國のブルジョアジー（既に他の總ての國のブルジョアジーと結んで彼等に對抗してゐるその自國のブルジョアジー）と、ビスマーク君の陰險な國際政策とに對して、戰はうと云ふのである！。

この綱領の國際的信條は、實際、自由貿易論者に比べて、恐ろしく低い水準に立つてゐる。自由貿易諸者もやはり、その努力の結果が『諸國民の國際的親交』に在る事を主張してゐるけれども、彼は商業を國際的にする爲、現實に何者かを爲して居り、決してかの自覺――總ての國民が自國內で商業を行ふといふ自覺――を以て滿足してはゐない。

勞働階級の國際的活動は、決して『國際勞働者協會（インタナショナル）』の存在に依賴するものではない。國際勞働者協會は只、この活動に對する中央機關を創設すべき最初の企てであり、又その與へた刺激に

依つて永久の効果を生ぜしむべき企てであつたが、惜しいかな、パリ・コンミュンの沒落以後、その最初の歴史的形體が維持しきれなくなつた。

ビスマークの『北ドイツ新聞』が、ドイツ勞働黨はその新綱領に於いて國際主義を廢棄したと報道して、その主人を喜ばせたのは、誠に正當である。

二（賃金の鐵則）

『これらの原理から出發して、ドイツ勞働黨は、有らゆる合法的手段に依つて、自由國家—及び—社會主義的社會の創設、賃金の鐵則と共に賃金制度の廢止、—及び—有らゆる形式の搾取の廢止、有らゆる社會的および政治的不平等の禁絶に努力する。』（右の中、賃金制度の一項だけが、ゴータ大會で「賃金勞働制度の廢止に依る、賃金の鐵則の破壞」と訂正された。）

『自由國家』については後段で批評する。

右に依れば、ドイツ勞働黨は今後、ラツサーレの『賃金の鐵則』を信ずる事になる！。而も念の入つた事には、彼等は『賃金の鐵則』と共に『賃金制度』（正しくは賃金勞働制度）を廢止するといふ無意味な言方までしてゐる。賃金制度が廢止されゝば、それの法則も（鐵則であらうと、

海綿則であらうと）廢止されるに極まつてゐる。然るにラツサーレの賃金勞働に對する戰鬪は、殆んど全くこの自稱法則の上に懸つてゐる。そこでラツサーレ派の勝利を證明するためには、『賃金制度』が（「賃金の鐵則」なしにでなく、是非とも）『賃銀の鐵則と共に』廢止されなければならない。

『賃金の鐵則に』ついては、人の善く知る通り、ラツサーレに屬する者は只『鐵』の一字で、それはゲーテの『永劫の大鐵則』から借りたのである。この『鐵』の字は一つの記號であつて、それを用ゐる者は正教信者と認められるのである、けれども若し我々がラツサーレの極印付で（從つてラツサーレの用ゐた意義で）この法則を受入れるとすれば、我々は又、その法則の基礎をも受入れねばならぬ事になる。然らばその基礎は何か。ランゲがラツサーレの死んでから間もなく云つた通り、それは（ランゲ自身も說いてゐた）マルサスの人口論である。若しマルサスの人口論が正しいならば、我々は如何にしてもその鐵則を廢止する事は出來ない。たとひ百回、賃金勞働を廢止しようとも駄目である。なぜと云ふに、その法則は賃金勞働制度を支配するばかりでなく、實に有らゆる社會制度を支配するのだから。只だこの理由に依つて、五十餘年來、經濟學者が盛んに論證した。曰く、社會主義は自然的基礎を有する貧困現象を廢止する事は出來ない。只

それを一般化し得るのみである。同時にそれを社會の全面に配布し得るのみである、

然しそれは必ずしも主要な點でない。ラッサーレの法則の間違つてゐる事は全然別として、眞の驚くべき退歩は次の點に存してゐる。

ラッサーレの死後、我が黨内に於いては、勞働賃金は勞働の價値若しくは價格でありそうに見えて、そうでなく、實に勞働力の價値若しくは價格に對する假面的形態に過ぎないといふ、科學的見解が確立してゐる。これと共に、勞働賃金に對する有らゆる從來のブルジョア説、並びにその説に對する有らゆる批評が、全然顚覆されて、そして次の事共が一々明白になつて來た。即ち賃金勞働者は只、或る時間のあいだ無賃で資本家の爲に（及び資本家と共に剩餘價値を消費する人々の爲に）働く限り、自分の生活の爲に働く事を許される（即ち生きる事を許される）といふ事。故に資本家的生産の全組織は、この無賃勞働の増大を旨として居るといふ事、それには勞働時間の延長、生産力の發達、勞働力のヨリ大なる緊張など、色々の手段があるといふ事。故に又賃金勞働制度は一つの奴隷制度であつて、而も其の奴隷制度が、勞働の社會的生産力の發達する程度に伴つて、益々殘酷なものになるといふ事。そして勞働者の賃金が少しくらゐ高くても安くても、その事實に變りのないといふ事。然るに、斯ういふ見解が我黨の間に益々深くはいつてゐ

る時、我々は再びラツサーレのドグマに立戻らうとして居るのである。尤も、ラツサーレが勞働賃金の何物であるかを知らず、只ブルジョア經濟學者の尻について、事物の外觀をばその本質と見たといふ事は、今では明瞭に知られてゐるに相違ないのではあるが。

そこでこれは丁度、或る奴隷制度の秘密を知つて、それに反抗して立つた時、まだ舊思想に捕はれた一人の奴隷が、その反抗運動の綱領に斯う書いたようなものである。曰く、奴隷制度は廢止されねばならぬ。なぜと云ふに、奴隷制度に於ける奴隷の給養は、或る低劣な最高限度を越える事が出來ないから！。

我黨の代表者等が、一般に黨員の持つてゐる意見に對して、こんな奇怪な罪を犯し得たといふその事實だけが、如何に……輕薄な心持で……彼等がこの妥協綱領の起草に當つたかを證明してゐるではないか！。

右の個條の結論としては、『有らゆる社會的および政治的不平等の禁絶』などといふ漠然たる字句を使はないで、階級差別が廢止されれば、その差別から發生する、有らゆる社會的および政治的不平等が自然に消滅する、といふべきである。

三　（國家の補助）

『ドイツ勞働黨は、社會問題解決の道を開く爲　國家の補助に依る、そして勞働民衆の、デモクラチツクな管理に屬する、生産組合の設立を要求する。この生産組合の中からして總合勞働の社會主義組織が發生するほど、それほど廣汎な範圍に於いて、この組合を、工業と農業の間に設立さすべきである。』（この個條は修正なしに採用された。）

これが、ラツサーレの『賃金の鐵則』に依る、豫言者の妙藥である。如何にも見事に『道が開』かれてゐる。現存する階級闘爭の代りに、『社會問題』といふ新聞言葉が提出され、その『解決』の爲に『道を開く』と云ふのだ。『總合勞働の社會主義組織』は、社會の革命的變化行程の中から生ずるのでなく、『國家の補助』（國家が設立する―勞働者が設立するのではない―生産組合に、國家が與へる補助）に依つて、生ずると云ふのだ。新らしい鐵道を作るのと同じように、公債で新らしい社會が作れるといふのは、如何にもラツサーレらしい想像だ！。

それでも……さすがに耻かしいと見えて、その『國家の補助』が『勞働民衆のデモクラチツクな管理の』下に置かれてある。

第一、ドイツの『勞働民衆』の過半數は農民であつて、プロレタリアではない。

第二、『デモクラチック』はドイツ語で、フォルクス・ヘルシャフトリヒ（民衆支配）である。然らば『勞働民衆の民衆支配的管理』とは何を意味するか、而もそれが、國家に對する斯樣な要求に依つて、現に支配力を持つても居らず、又支配力を持つべきほど成熟しても居らぬといふ、全くの無自覺を證明してゐる、勞働民衆なるに於いてをや！。

ルイ・フイリップの時代に、ビュシエイが、フランス社會主義者に反對して作つた（そして「アトリエ」派の保守的勞働者に依つて採用された）處方書に對して、こゝで批評を加へるは無用であらう。我々の主要な批難點は、必ずしもこの特殊な妙藥を綱領の中に加へた事に在るのではなく、全體に於いて、階級運動の立場からお宗旨運動に逆戻りをした點に在る。（ビュシエイは元サンシモン派の學者で、產業組合に依つて共產主義に到達すると稱し、フランスに產業組合運動を起した人。「アトリエ」は「勞働者ばかりで發行する、勞働階級の特殊機關」と稱した雜誌で、言葉の意味は「工場」である。その雜誌がビュシエイの說に贊成してゐた）

勞働者が組合的生產の條件を、社會的規模の上に（それも初めの間は國家的規模の上に）現出させようとするのは、即ち現在の生產條件の變革に努める意味であつて、國家の補助に依る產業

組合の設立とは何等の共通點もない。若し夫れ現在の産業組合は、それが政府からもブルジョアからも保護を受けない、純然たる獨立の勞働者團體である限りに於いてのみ、價値を有するのである。

4 （「自由國家」）

これからいよ〳〵民主論の章に入る。

（A）『國家の自由的基礎。』

前記綱領の（二）に依れば、ドイツ勞働黨は『自由國家』の建設に努力する。

自由國家――一體それはどんなものか。

狹隘な臣僕的俗論から脱却してゐる勞働者に取つては、國家を自由にする事は決してその目的でない。ドイツ帝國に在つては、『國家』は殆んどロシアに於けると同じく『自由』である。（即ち、國家は人民に對して勝手な事を爲し得る。）元來、自由とは、國家をば、社會の上位に立つ機關である事から、全くその下位に立つ機關に變更する事に在る。從つて現今、國家の形體が自由か不自由かと云ふのは、社會が『國家の自由』を制限する、その程度に依るのである。（だから「自由國家などと云ふのは、馬鹿の骨頂である。）

ドイツ勞働黨は――少なくとも、若し彼等がこの綱領を採用するならば――その社會主義的思想が淺薄といふ程度にまでも達して居らぬ事を示すものである。卽ち彼等は、現存の社會を現存の國家の基礎と目せず、（又、將來の社會を將來の國家の基礎と目せず）、寧ろ國家がそれ自身、特殊の精神的、道德的、自由的の基礎を有する、獨立の存在だと考へてゐる。

更に綱領の中に使用されてゐる、『今日の國家』『今日の社會』といふ言葉の滅茶な誤用、及び彼等が要求を向けてゐる所の、その國家に關する一層滅茶な誤解は何事だ！。

『今日の社會』は資本家社會である。それが國に依つて、中世的混交物から脫却してゐる程度に大小があり、又、それ〴〵特殊の歷史的發達に依つて變態を生じてゐる程度にも大小があり、又、その發達の程度にも大小はあるが、何しろ現にそれが總ての文明國に存在してゐる。之に反し、『今日の國家』はその國境と共に差別を呈してゐる。ドイツはスキスと違つてゐる。イギリスはアメリカと違つてゐる。故に『今日の國家』なる者は、一つの虛構である。

然し、形體の種々なる相違に係はらず、諸文明國に於ける諸種の國家は、一つの共通點を持つてゐる。卽ち、大なり小なり資本家的に發達した、近世ブルジョア社會の地盤の上に立つてゐるといふ事である。從つて彼等は、或る共通の根本性質を持つて居るのである。この意味に於いて

我々は『今日の國家組織』を云々し、それを將來（即ち、今日の國家の根本たるブルジョア社會が死滅した時の國家組織）と對比すべきである。

そこで問題は、共産社會に於いて國家組織が如何なる變化を生ずるかである。換言すれば、今日の國家の機能に類比すべき、如何なる社會的機能が、共産社會に存するかである。この問題は科學的にのみ答へらるべきであつて、『國民』といふ言葉と、『國家』といふ言葉とを千べん結び合せて見た所で、蚤の一跳びほども解決に近づき得るものではない。

資本家社會と共産社會との間には、前者から後者に移る革命的變轉時代がある。そしてそれに相應して、亦た政治上の過渡時代がある。その過渡時代の國家は即ち『無産階級の革命的獨裁』となるより外に仕方がない。（「無産階級の革命的獨裁」といふ明白な言葉は、マルクスが初めてこの文章の中に使つたのである。即ちこれがボリシエヰキの有名な標語の、最初の出所である。）

然るにこの綱領は、この無産階級の革命的獨裁についても、又共産社會に於ける將來の國家組織についても、何等の關する所がない。

綱領の政治的要求は、古くさい、ありふれた、デモクラチツクのお祈り文句より外に何もない。即ち普通選擧、直接立法、民權、民軍など。これらは總てブルジョア民黨や、自由平和同盟の受

賣に過ぎない。そしてこの單純な諸要求は、妄想的に誇張されたのでない限り、既に實現されてゐる。但しそれらの實現されてゐる國家は、ドイツ帝國の内になく、スキスやアメリカ合衆國に在る。この種の『將來の國家』は卽ち現今の國家である。只それがドイツ帝國の『ワク外』に在るだけの事だ。

然し忘れた事が一つある。ドイツ勞働黨は『現今の國家のワク内』卽ち自分の國家なるドイツ帝國のワク内で運動する事を明言してゐる。（若しそうでなかつたら、彼等の要求は大部分、無意味になる。既に得てゐるものを要求する筈がない。）そこで彼等は主要な一事を忘れてはならない筈である。卽ち、かの總ての（前に列擧したピカ〳〵するオモチヤは、謂ゆる人民主權の承認に基づくものである事、從つて民主共和國に於いてのみ行はれ得るものである事。

我々は今、遠慮を要する事情の下にあつて、フランスの勞働綱領が、ルイ・フイリツプやルイ・ナポレオンの下で要求したような、民主共和國を要求すべき（地位に居ない）のだから、この國家に對して、（卽ちこの、議會制度の形式を以て飾られた、封建的混交物を殘存した、とくにからブルジョアジーの勢力下にある、官僚的に結成された、警察で護衛された、軍國的專制政治に過ぎない國家に對して）、民主共和國に於いてのみ意義を有する事柄を要求するような、そんな……眞

似事に逃避すべきでない。……（そんな空虛な言葉ばかりで體裁を繕ふのは卑怯だ。）

俗說デモクラシーは、民主共和國の中に黃金時代を認めるもので、このブルジョア社會の最後の國家形態（即ち民主共和國）に於いてこそ、階級鬪爭が初めて本統の決戰を爲すべきものだと云ふ事などは夢にも考へないのだが、そのデモクラシーですらも、右の場合のデモクラシー（即ち警察の許可と、論理の不許可との範圍內に踏み止まらうとするようなデモクラシー）に比べると、山ほどの高さになる。

綱領の起草者が、實際上、『國家』を政府機關と解し、或はそれを、分業に依つて社會から隔離された、特殊の一機關として存在するものと解した事が、一次の言葉で證明される。即ち『ドイツ勞働黨は國家の經濟的基礎として、單一なる累進所得稅云々を要求する。』租稅は固より政府機關の經濟的基礎であつて、その他の何者でもない。スキスに現存する『將來の國家』に於いては、この要求は可なりに實現されてゐる。所得稅は、種々なる社會階級の有する、種々なる所得源泉を豫想するものであり、從つて又資本家社會を豫想するものである。故にリヴアプールの財政改革黨（グラツドストンの兄弟を首領に戴くブルジョア團體）がドイツ勞働黨の綱領と同一の要求をしてゐるのは、決して驚くに足りない。（だからドイツ勞働黨は、この綱領に依れば、ブルジョア社會

を承認し、その國家組織を肯定し、國家は只だ分業上の必要から生じた特殊の一機關だと目した事になる。ブルジョアの國家と、無產階級の國家との區別を少しも考へに入れてゐないのである。即ち國家に對する解釋が滅茶なのである。）

（B）『國家の精神的および道德的基礎。』

（1）國家に依る、一般平等の國民教育。一般義務教育。無料教育。』

平等の國民教育?。この言葉の意味は何んと解すべきか。今日の社會に於いて、（こゝでは今日の社會の事だけ考へてゐるのだが）、總ての階級の教育が平等であり得ると信ずるのか。それとも高級の諸學年をも、强制的に小學校の程度に引下げて、賃金勞働者や農民の經濟關係と適合する樣なものにしようと云ふのであるか、

『一般義務教育。無料教育。』前者はドイツにすらも存在して居り、後者は（初等教育に對しては）スキスと合衆國に存在してゐる。合衆國の或る諸州では、高等教育も『無料』になつてゐるが、それは實際上、上流階級が自分等の教育費を國庫から支拂はせる事を意味してゐる。ついでに（A）の第五項に要求されてゐる『無料裁判』も、同樣の事に歸着する。刑事裁判はどこでも無料である。民事裁判は殆んど悉く財產の爭ひだから、殆んど只だ有產階級だけの事である。然る

にその裁判費用を國庫から出してやらうと云ふのか。

學校の事に關する個條は、少なくとも、小學校と聯絡する專門學校（理論的および實際的のもの）を要求すべきである。

『國家に依る國民教育』は斷乎として排斥すべきである。一般的の法律に依つて小學教育の手段を決定し、教員資格や學科課程を規定する事、及び合衆國で行はれて居るように、視學を設けて法律規定の實行を監督する事などは、國家を國民教育者に指名するのとは、全く別な事である。（前者は必要だが、後者は以ての外である。）それよりも寧ろ、政府や教會が少しでも學校に感化を及ぼす事を排除すべきである。更にドイツ帝國では、その反對に、國家が國民から荒療治の教育を與へられる必要がある。（我々は今、『將來の國家』について語つてゐるのだなどと逃げても駄目だ。謂ゆる『將來の國家』がどんなものであるかは、前に示した通りではないか。）

綱領は全體として、デモクラシーの鳴物澤山に係らず、國家に對するラッサーレ派の屈從的信仰で、底の底まで感染されてゐる。更に惡るい事は、それがデモクラシーの奇蹟信仰と混じてゐる。否むしろそれは、その二種の奇蹟信仰の妥協であつて、二種共に社會主義とは距離の遠い者である。

『科學の自由！』それはプロシヤ憲法の一項である。そんな者がどうしてこゝに在るのか。

『良心の自由！』若し今日、カトリック教會に對する闘爭の行はれてゐる折柄、自由主義者にその古い標語を思ひ出させるとしたら、それは恐らく次の様なものだらう。『各人は、警察から鼻を突き込まれる事なしに、自分の宗教的……（欲求）を遂行し得ねばならぬ。』然し労働黨たる者は宜しくこの機會に於いて自己の意見を發表すべきである。即ち、ブルジョア的『良心の自由』とは、有ゆる可能な種類の、宗教的良心の自由を寛容する事に過ぎないが、労働黨は寧ろ有らゆる宗教的幽靈から良心を解放する事に努力するものであると。然るに綱領の起草者は、そのブルジョアの水平線を踏み越えようとしなかつた。

私の批評はもはや終りに近づいた。綱領の殘りの部分は、何ら本質的の要素でない。あとは極く簡單に片づけられる。

（2）『標準労働時間。』

どこの國の労働黨でも、こんな漠然たる要求に遠慮してゐるのはない。どこでも必ず、現時の狀態の下に於いて標準と目さるべき労働時間の長さを規定してゐる。

（3）『婦人労働の制限と兒童労働の禁止。』

標準勞働時間の設定は、勞働時間の繼續、休止等に關する限り、既に婦人勞働の制限を含んでゐる筈である。若しそれ以上を意味するとすれば、勞働部門の中、特に婦人の健康に有害な者、若しくは特に女性の德性を傷つける者から、婦人勞働を除外する事だけである。起草者がそれを考へてゐたら、こゝに書き現はすべきであつた。

『兒童勞働の禁止。』こゝに年齡の制限を明記する事が絕對に必要である。

兒童勞働の一般的禁止は、大產業の生存と兩立するものでない。だからそれは、只だ殊勝な無効な希望たるに止まる。

又若しそれが可能としても、それを遂行する事は反動的である。なぜと云ふに、年齡に應じて勞働時間が嚴密に規定され、更に他の適切な兒童保護法が採用され、そして少年時代から生產的勞働と敎育との結合が行はれるならば、それは現社會を改革する最も有力な手段の一つとなる。

(4) 『工場、職場、及び家內工業の國家的監督。』

ドイツ國家に對しては、次の如き明白な要求をして置くべきである。監督は法律の規定に依つてのみ解職される事。各勞働者は監督官の職務怠慢に對して告發の權利を持つ事。總ての監督官は醫師の資格を有すべき事。

（5）『監獄勞働の規定。』

これは一般的の勞働者綱領に入れるには餘り小さい要求である。然し如何なる場合に於いても勞働黨は、競爭を恐れるが爲に、普通囚人が畜生のように取扱はれる事を望む者でない事、又殊には、囚人の爲に身心改善の唯一の手段たる、その生産的勞働を奪はうとする者でない事を、明かに表明すべきである。これが社會主義者に期待さるべき最少の限度である。

（6）『有効なる雇傭者責任法。』

『有効なる』雇傭者責任法とは如何なる意義か、それを明示すべきである。

ついでに云ふ。起草者は標準勞働時間の問題に關して、工場衞生、傷害保護等に關する、工場立法の方面を見落してゐる。それらに關する規定が犯された時、この責任法が初めて適用されるのである。……

――我は語つた、そして我が精神を救つた。――

（譯者註。この最後の一句は、マルクスがバイブルを引用したもの。又、以上の文中、六號の小文字を使つた部分は、すべて譯者の註釋的附加である。）

綱領評註添書

（附錄一）

（一八七五年五月五日、ブラッケ宛、マルクス）

親愛なるブラッケ！

下記の合同綱領の評註は、君が讀了の後、回讀の爲、ガイフ、アウエル、ペーベル、及びリープクネヒトに渡して貰ひたい。僕は仕事に責められて、醫者が許してくれる程度以上、遙かに餘計な勞働をしてゐる。それでこんな長文句を書く事は決して有りがたくないのだが、然し今この手紙を差向ける黨友諸君が、今後に於ける僕の行き方に對して、間違つた解釋をする事の有り得ない爲には、やはりそれが必要であつた。（合同大會の擧行の後、エンゲルスと僕は同じく簡單な聲明書を發表するだらう。その內容は、我々が右の原則綱領と全く少しも關係がないといふ事である。）

これは決して許す事が出來ない。なぜと云ふに、ドイツ以外では、我々の敵が、謂ゆるアイゼナハ黨の運動は我々がロンドンから秘密に指圖して居るのだといふ說――全然間違つた說――を